

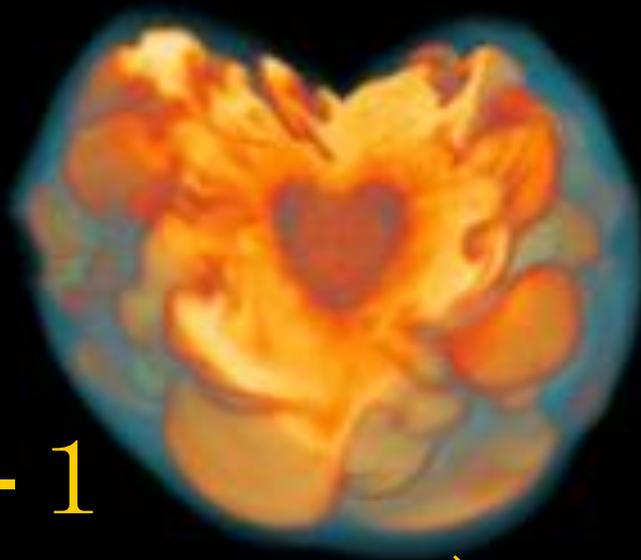
目次

- ✓ 第1回目 高エネルギー天体物理の基礎
「星の進化、超新星爆発の標準理論」
- ✓ 第2回目 シミュレーション研究最前線
「爆発天体現象のエンジンは解明されたか？」
- ✓ 第3回目 ニュートリノ輻射流体数値計算法
ガンマ線バーストのエンジン
- ✓ 第4回目 マルチメッセンジャー天文学に向けて
(重力波・ニュートリノ・多波長電磁波観測)

今日の前半部のお題

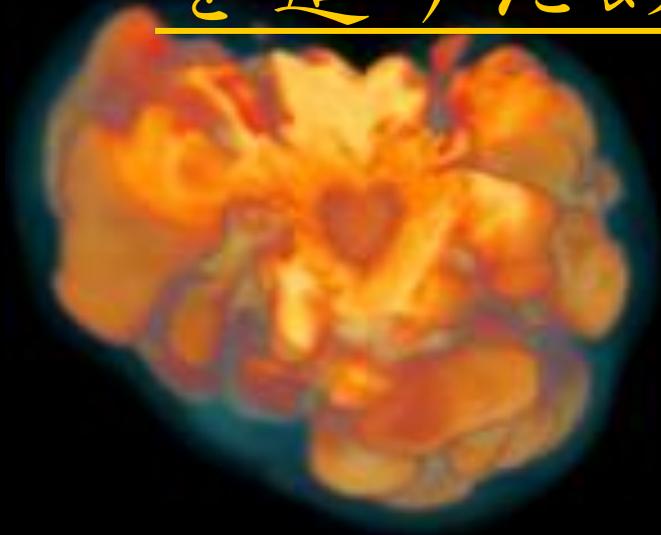
§ 3-2 ニュートリノ輻射+流体計算法
{ 流体計算 (数値流体解法)
{ ニュートリノ輻射輸送計算

§ 3-3 ガンマ線バーストの中心駆動源



§ 3-1

超新星の動的（ダイナミカル）な進化
を追うための数値輻射流体力学



内容

- ・ 流体力学基礎方程式の導出 (done)
- ・ ランキン・ユゴニオ(Rankine-Hugoniot) 関係
- ・ Riemann 問題
- ・ ニュートリノ放射輸送

流体力学基礎方程式のまとめ

未知数

1本 質量保存

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + \text{div} \rho \mathbf{v} = 0$$

運動量の式

3

$$\frac{\partial \rho v_i}{\partial t} + \frac{\partial \pi_{ij}}{\partial x_j} = \rho g_i$$
$$\pi_{ij} = \rho v_i v_j + \delta_{ij} p$$

エネルギーの式

1

$$\frac{\partial}{\partial t} (\rho e) + \text{div} [(\rho e + p) \vec{v}] = -\rho \vec{v} \cdot \text{grad} \Phi$$

1 状態方程式 $p(\rho)$ Polytropic
ポリトロープ状態方程式

1 ポアソン方程式 $\Delta \Phi = 4\pi G \rho$

ρ 1 \mathbf{v} 3

p 1 g_i 1

e 1 Φ 1

$g_i = -\nabla_i \Phi$

方程式の数と未知数の数が同じで方程式系が閉じている。

「方程式の数と未知数の数が同じで方程式系が閉じている」
⇒初期条件を与えれば、
その後の時間発展が(原理的には)分かるはず。

☆ただ方程式が非線形で、複雑。
解析解はごく限られた問題でしか得られない。

$$\frac{\partial \rho v_i}{\partial t} + \frac{\partial \pi_{ij}}{\partial x_j} = \rho g_i$$

$$\pi_{ij} = \rho v_i v_j + \delta_{ij} p$$

したがって、
流体の運動を追うためには、数値計算が不可欠。
☆更に偏微分方程式を数値的に解かなくてはならない。

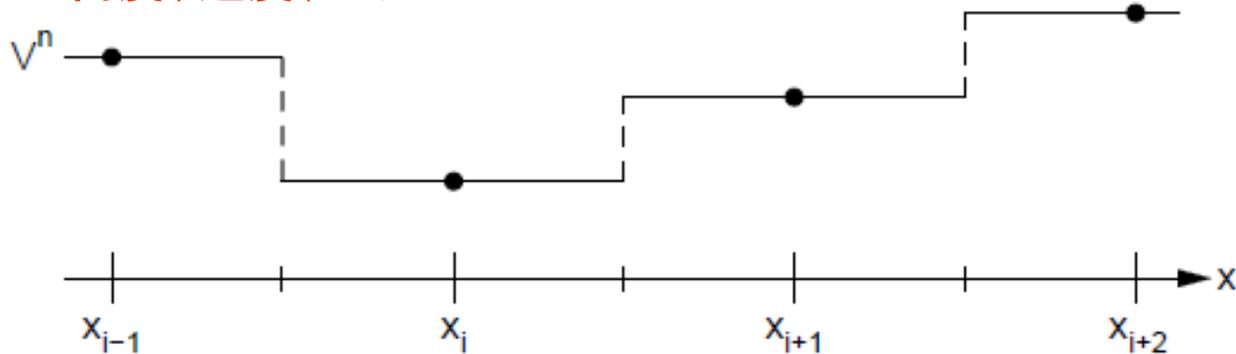
いかに精度良く、数値的に流体の時間発展を追うか？
数値流体力学 (Computational Fluid Dynamics: CFD)

内容

- 流体力学基礎方程式の導出
- Riemann問題に向けて
 - ☆ Rankine Hugoniot関係導出
 - ☆ 具体例: Strong shock

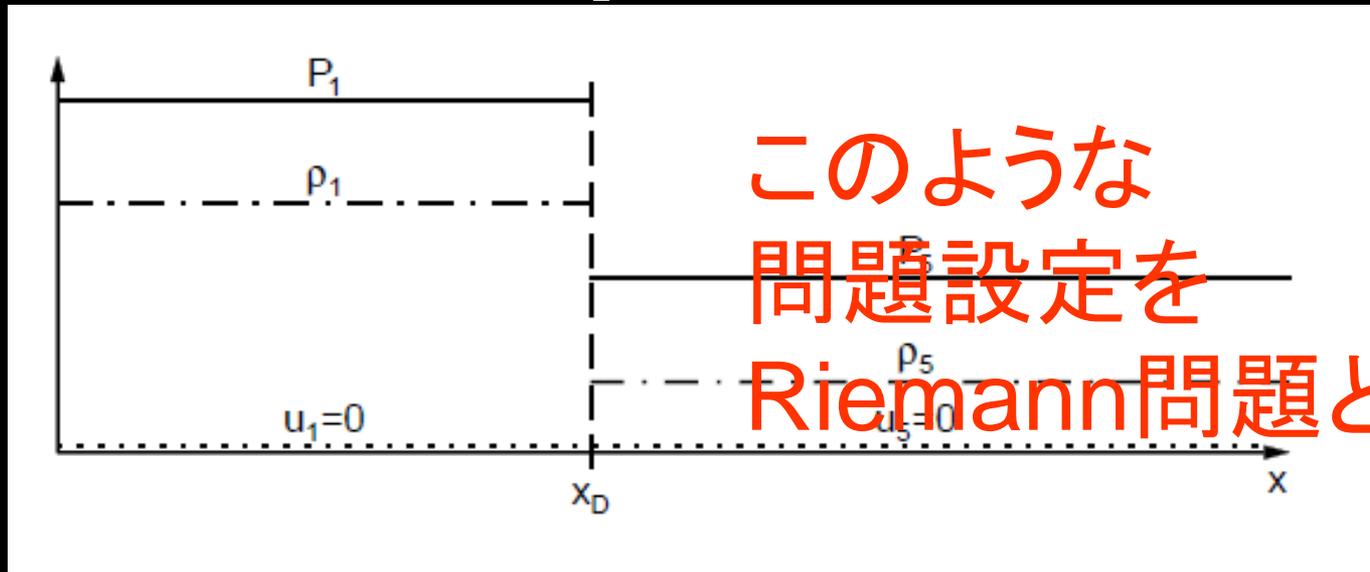
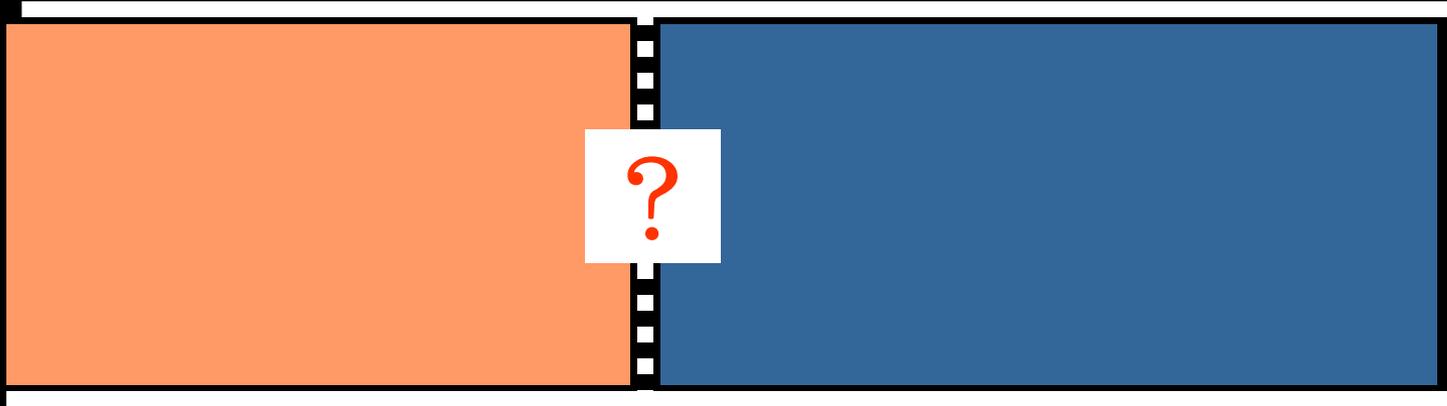
3次元シミュレーション例

密度、速度、圧力



ある瞬間、各点各点で密度、圧力、速度が不連続に与えられたとき、その後の各物理量の時間発展を数値的に追うこと、これがCFDのココロ。

もっと単純化すると、二つの状態の異なるガスをいれた容器のふたを取ったとき、その後のガスのダイナミクスが分かれば良い。



このような問題設定を Riemann問題と呼ぶ。

Riemann問題を解くための準備(1)

一次元保存系の流体方程式

$$\rho_t + (\rho u)_x = 0$$

$$(\rho u)_t + (\rho u^2 + p)_x = 0$$

$$(\rho E)_t + [(\rho E + p)u]_x = 0$$

コンパクトに以下のように書く。

$$\mathbf{U}_t + \mathbf{F}(\mathbf{U})_x = 0$$

$$\mathbf{U} = \begin{pmatrix} \rho \\ \rho u \\ \rho E \end{pmatrix}$$

$$\mathbf{F}(\mathbf{U}) = \begin{pmatrix} \rho u \\ \rho u^2 + p \\ (\rho E + p)u \end{pmatrix}$$

Riemann問題を解くための準備(1)

$$\mathbf{U}_t + \mathbf{F}(\mathbf{U})_x = 0$$
 に対して、

$$\mathbf{G} \equiv (\mathbf{F}(\mathbf{U}), \mathbf{U})$$

$$\text{Div}(\mathbf{F}_1, \mathbf{F}_2) \equiv (\mathbf{F}_1)_x + (\mathbf{F}_2)_t$$

を定義すると、

$$\text{Div}\mathbf{G} = 0$$
 と書ける。

任意の関数 Φ にたいして以下の関係が成り立つ。

$$\int \Phi \text{Div}\mathbf{G} \, dxdt = 0$$

部分積分して以下の関係が得られる。(無限遠で \mathbf{G} はゼロ)

$$\int \text{grad}\Phi \cdot \mathbf{G} \, dxdt = 0$$

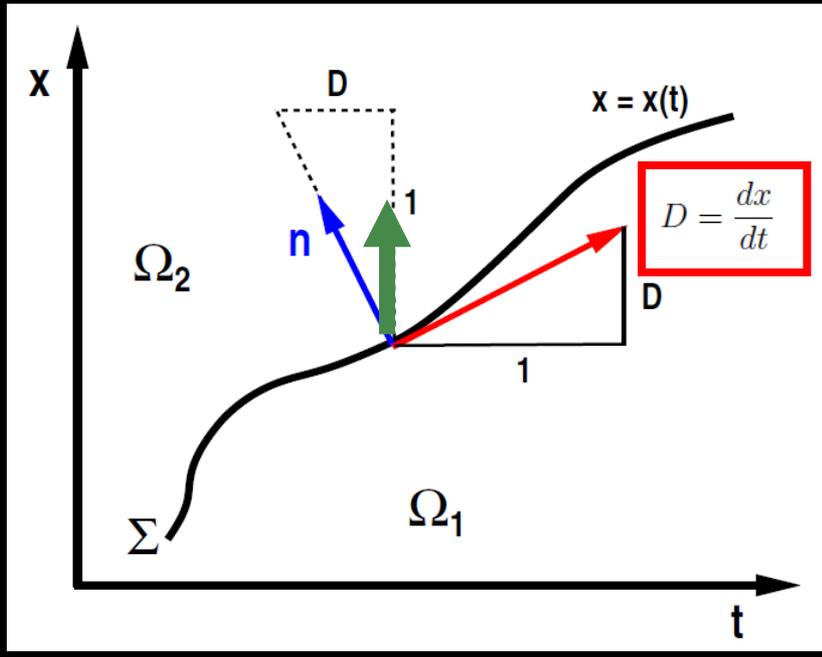
$$\int_{\Omega} \text{grad}\Phi \cdot \mathbf{G} \, dxdt = 0$$

領域 Ω を二つの領域に分けて考える。

$$\int_{\Omega_1} \text{grad}\Phi \cdot \mathbf{G} \, dxdt + \int_{\Omega_2} \text{grad}\Phi \cdot \mathbf{G} \, dxdt = 0$$

部分積分する。 Div $\mathbf{G} = 0$

$$\int_{\Omega_1} \text{Div}(\Phi\mathbf{G}) \, dxdt - \int_{\Sigma} \Phi \text{Div}\mathbf{G} \, dxdt$$

$$+ \int_{\Omega_2} \text{Div}(\Phi\mathbf{G}) \, dxdt - \int_{\Sigma} \Phi \text{Div}\mathbf{G} \, dxdt = 0$$


$$[\mathbf{G} \cdot \mathbf{n}] \equiv \mathbf{G}_1 \cdot \mathbf{n} - \mathbf{G}_2 \cdot \mathbf{n} = 0$$

グリーンの法則より、面積分に変換。

$$\int_{\Sigma} \Phi \mathbf{G}_1 \cdot \mathbf{n} \, d\sigma - \int_{\Sigma} \Phi \mathbf{G}_2 \cdot \mathbf{n} \, d\sigma = 0$$

$$D = \frac{dx}{dt}$$

不連続面の速度を用いて

不連続面の法線方向のベクトルは

$$\mathbf{n} = \frac{1}{\sqrt{D^2 + 1}} \mathbf{e}_x - \frac{D}{\sqrt{D^2 + 1}} \mathbf{e}_t$$

と書ける

$$\int_{\Sigma} \Phi (\mathbf{G}_1 - \mathbf{G}_2) \cdot \mathbf{n} \, d\sigma = 0$$

$\mathbf{G} \equiv (\mathbf{F}(\mathbf{U}), \mathbf{U})$ を思い出すと、 \mathbf{n} と内積を取って

$$-D[\mathbf{U}] + [\mathbf{F}(\mathbf{U})] = 0$$

$$D[\rho] = [\rho u]$$

$$D[\rho u] = [\rho u^2 + p]$$

$$D[\rho E] = [(\rho E + p)u]$$

$$[\mathbf{G} \cdot \mathbf{n}] \equiv \mathbf{G}_1 \cdot \mathbf{n} - \mathbf{G}_2 \cdot \mathbf{n} = 0$$

$$D = 0$$

(衝撃波静止系)では以下の関係が成り立つ、

$$\rho_1 u_1 = \rho_2 u_2 = M$$

$$\rho_1 u_1^2 + p_1 = \rho_2 u_2^2 + p_2$$

$$u_1(\rho_1 E_1 + p_1) = u_2(\rho_2 E_2 + p_2)$$

$$\rho_1 u_1 = \rho_2 u_2$$

$$\rho_1 u_1^2 + p_1 = \rho_2 u_2^2 + p_2$$

$$u_1(\rho_1 E_1 + p_1) = u_2(\rho_2 E_2 + p_2)$$

$$E = u^2/2 + \varepsilon$$

衝撃波

Rankine-Hugoniot関係と呼ぶ。

3番目のエネルギーの式から

$$\frac{u_1^2}{2} + \varepsilon_1 + \frac{p_1}{\rho_1} = \frac{u_2^2}{2} + \varepsilon_2 + \frac{p_2}{\rho_2}$$

移項して、

$$\frac{1}{2}(u_1 - u_2)(u_1 + u_2) + \varepsilon_1 - \varepsilon_2 + \frac{p_1}{\rho_1} - \frac{p_2}{\rho_2} = 0$$

1番目の質量保存の式からMを使って、
2番目に代入すると

$$M = -\frac{p_1 - p_2}{u_1 - u_2}$$

1番目の質量保存の式から、比体積を定義して

$$\tau \equiv 1/\rho$$

$$u_i = M\tau_i, \quad i = 1, 2$$

二番目の流束保存に代入すると、

$$M^2 = -\frac{p_1 - p_2}{\tau_1 - \tau_2}$$

$$-\frac{p_1 - p_2}{2M}(M\tau_1 + M\tau_2) + \varepsilon_1 - \varepsilon_2 + p_1\tau_1 - p_2\tau_2 = 0$$

$$\frac{p_1 + p_2}{2}(\tau_1 - \tau_2) + \varepsilon_1 - \varepsilon_2 = 0$$

この曲線を**衝撃波断熱曲線**、
Rankine-Hugoniot断熱曲線
と呼ぶ。

内部エネルギーは状態方程式を用いて、

$$\varepsilon = \varepsilon(p, \tau) \quad (\text{ここでは圧力、密度依存とする})$$

Hugoniot曲線は二つのパラメーターで書ける。

$$\mathcal{H}_1(p, \tau) \equiv \varepsilon(p, \tau) - \varepsilon(p_1, \tau_1) + \frac{p + p_1}{2}(\tau - \tau_1)$$

Hugoniot 曲線から 読み取れる重要な性質

(1) 初期の状態が分かっているとき、

$$(p_1, \tau_1)$$

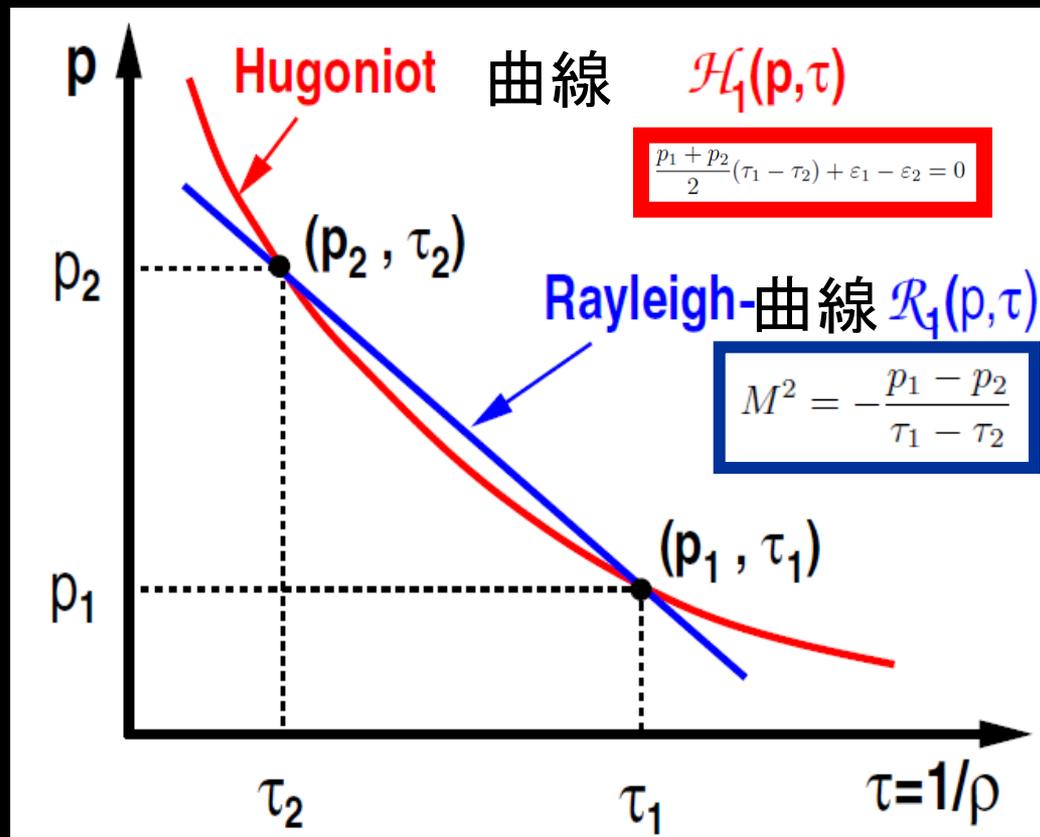
衝撃波背面の物理量
はただ一つのパラメータ
により指定される。

例えば、 p_2 が与えられると、
 τ_2 は断熱曲線より与えられ、
そうすると、 M がわかり、
そうすると、 u_1, u_2 も分かる。

(2) (p_1, τ_1) と (p_2, τ_2) を
結ぶ直線 (Rayleigh直線) の傾き

$$M^2 = -\frac{p_1 - p_2}{\tau_1 - \tau_2}$$

が、流束 M を与える。



☆Question!

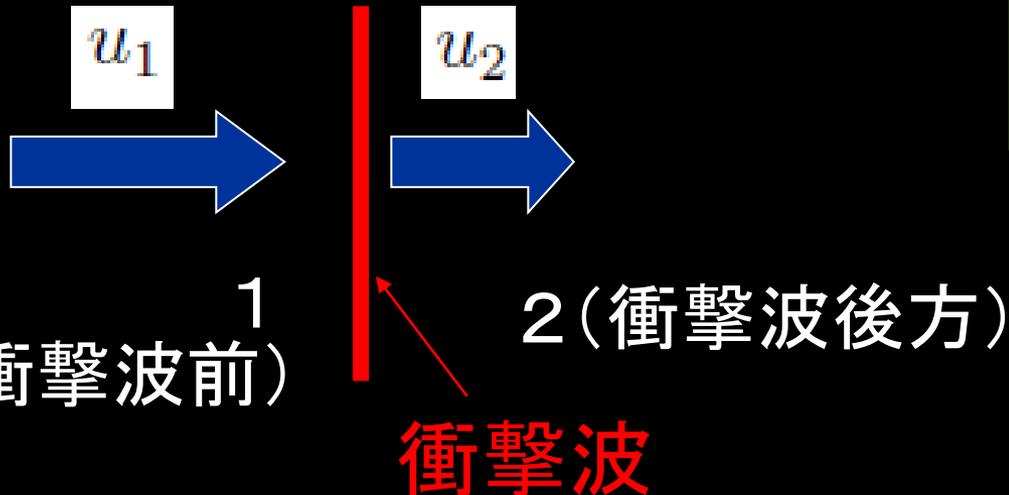
初期の状態から、Hugoniot
曲線に載っている点だったら、
どんな点にでも状態が遷移
することが可能か？ **NO!**

エントロピーは以下のように書ける。

$$s_2 - s_1 = \frac{1}{12T_1} \left(\frac{\partial^2 \tau}{\partial p_1^2} \right)_s (p_2 - p_1)^3$$

$$\left(\frac{\partial^2 \tau}{\partial p^2} \right)_s > 0$$

衝撃波通過後は
エントロピーが増加すべし。



だから、 $p_2 > p_1$

$$M^2 = -\frac{p_1 - p_2}{\tau_1 - \tau_2}$$

$M^2 > 0$ より、 $\tau_1 > \tau_2$, 密度は
衝撃波背面で上がるべき。

$\tau \equiv 1/\rho$ だったので、

さらに

$$u_i = M\tau_i \quad , \quad i = 1, 2 \quad \text{より、}$$

$$u_1 > u_2$$

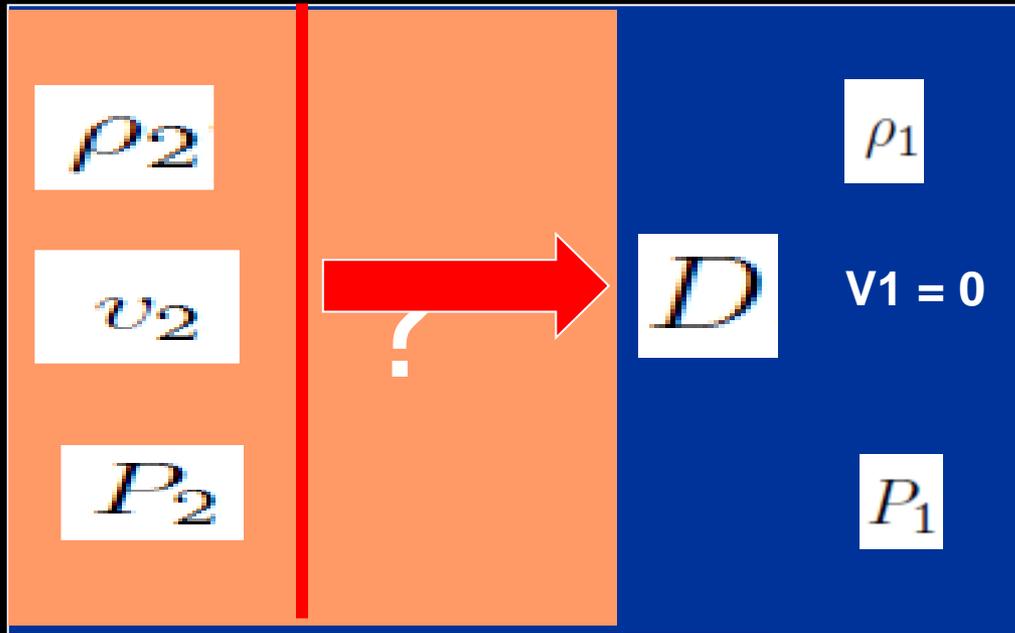
であることが分かる。

内容

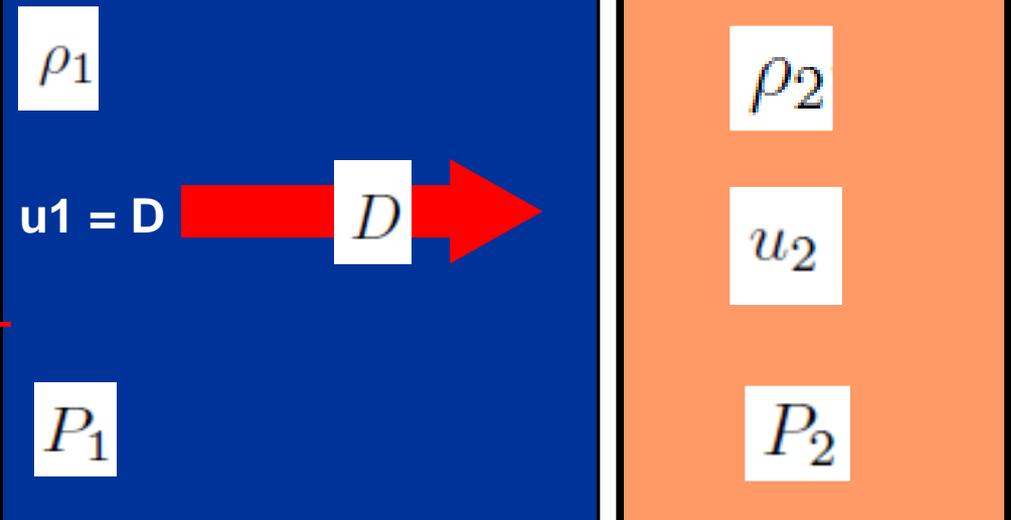
- 流体力学基礎方程式の導出
- Riemann問題に向けて
 - ☆ Rankine Hugoniot関係の導出
 - ☆ 具体例: Strong shock

Strong shock(強い衝撃波) の場合

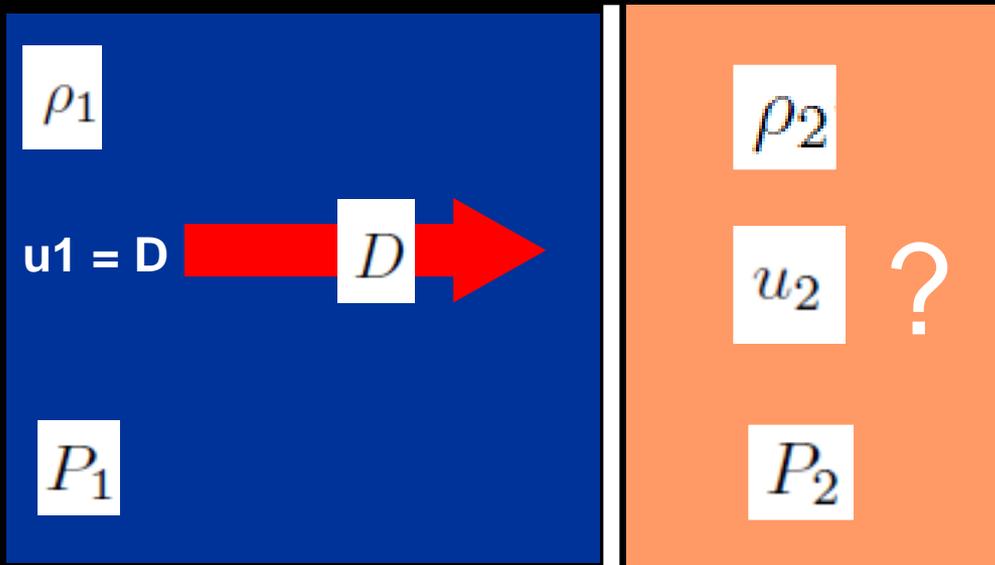
今、 ρ_1 P_1 で静止 ($v_1 = 0$) しているガスに、速度 D で衝撃波が飛び込んできたとする。この場合衝撃波背面の物理量を求めたい。



衝撃波静止系に移る



$u_2 = D - v_2$ に注意!



u2 = D - v2に注意!

RH関係の3つの式は以下と同値。

$$\frac{\rho_2}{\rho_1} = \frac{(\gamma + 1)M_{a1}^2}{(\gamma - 1)M_{a1}^2 + 2}$$

$$\frac{p_2}{p_1} = \frac{2\gamma M_{a1}^2}{\gamma + 1} - \frac{\gamma - 1}{\gamma + 1}$$

$$\frac{T_2}{T_1} = \frac{[2\gamma M_{a1}^2 - (\gamma - 1)][(\gamma - 1)M_{a1}^2 + 2]}{(\gamma + 1)^2 M_{a1}^2}$$

☆この式の導出
宇宙流体力学(坂下志郎、池内了)
など参照

$M_a \equiv u/c$ → 音速

マッハ数

- > 1 超音速 (supersonic)
- < 1 亜音速 (subsonic)

今、強い衝撃波の場合を考える。

$$M_{a1} \gg 1$$

$$\rho_2 = \frac{\gamma + 1}{\gamma - 1} \rho_1$$

$$\rho_1 u_1 = \rho_2 u_2$$

$$u_1 = D$$

$$u_2 = \rho_1 u_1 / \rho_2 = \frac{\gamma - 1}{\gamma + 1} D$$

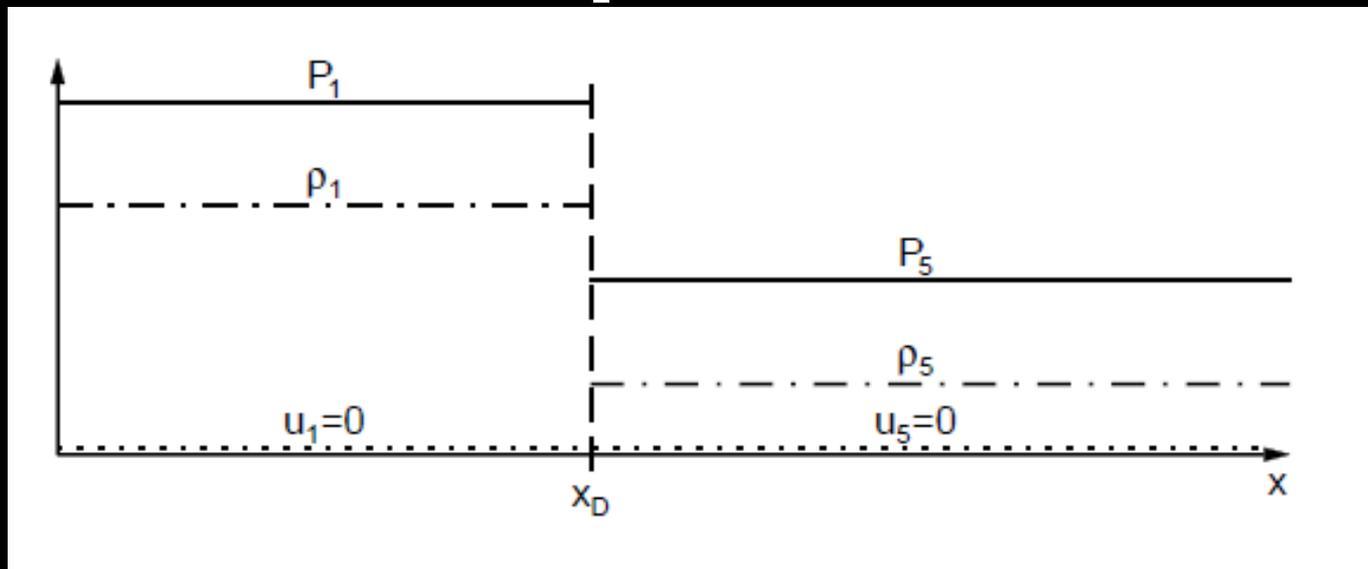
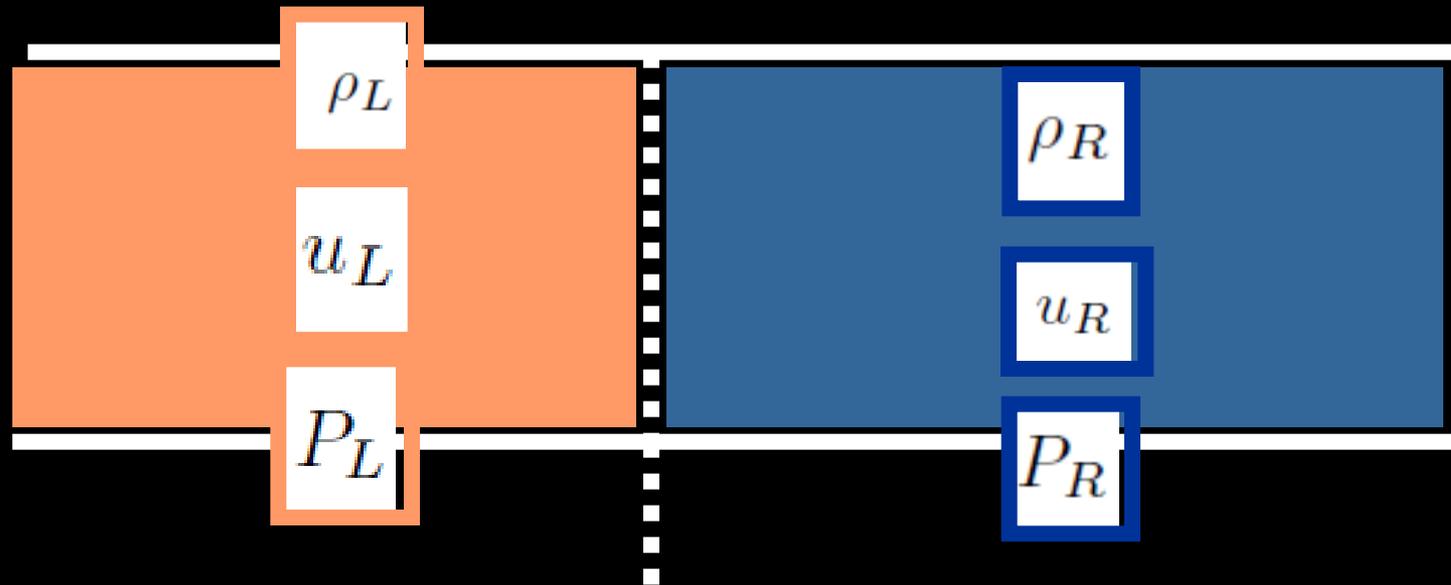
$$v_2 = D - u_2 = \frac{2}{\gamma + 1} D$$

V2は実験室系、u2は衝撃波静止系の量であることに注意!!!

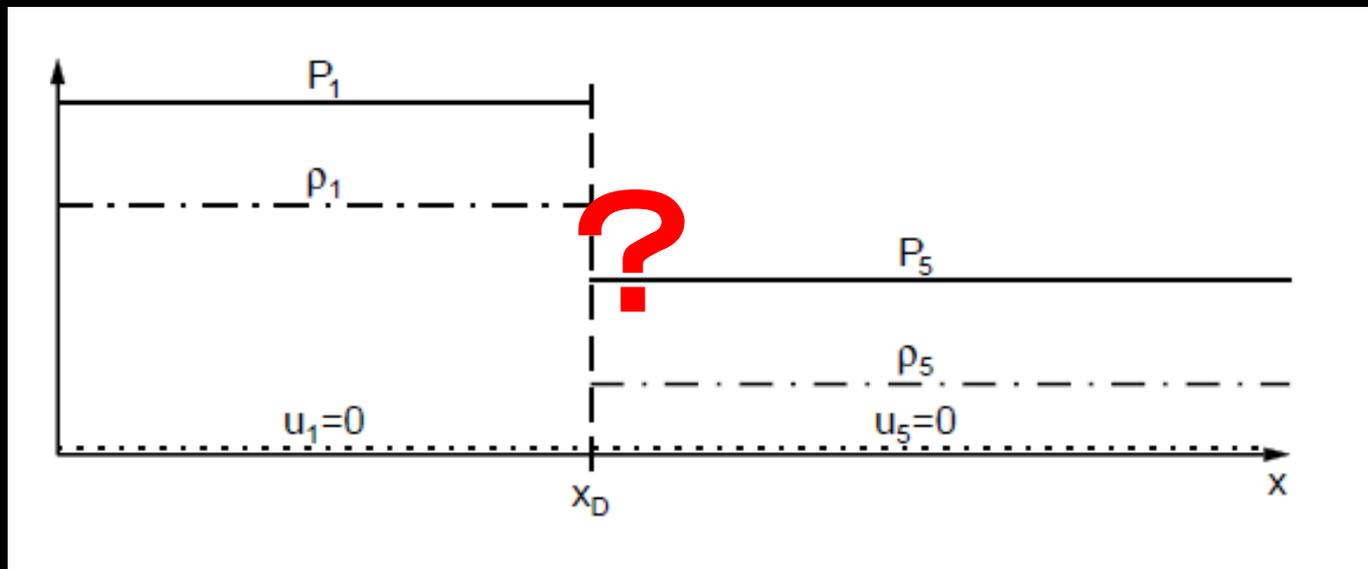
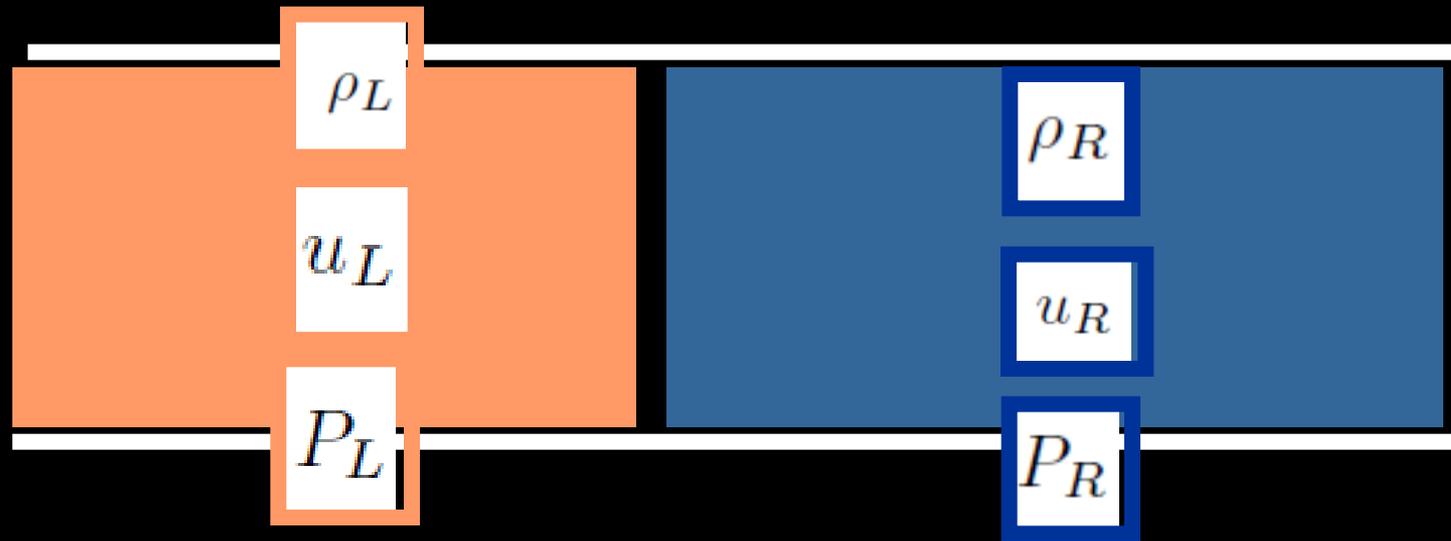
$$P_2 = \frac{2\gamma}{\gamma + 1} P_1 \frac{u_1^2}{c^2} = \frac{2\gamma}{\gamma + 1} P_1 \frac{D^2}{c^2}$$

衝撃波背面の量が、衝撃波前面の量と衝撃波の速度で表せた。
(強い衝撃波問題が解けた)

Riemann問題



Riemann問題



未知数勘定

CD

左右の
密度(2)、
速度、
圧力、
RSの速度
CDの速度、
FSの速度
(7未知数)

⇔

RH

7本

(内訳

RS:3

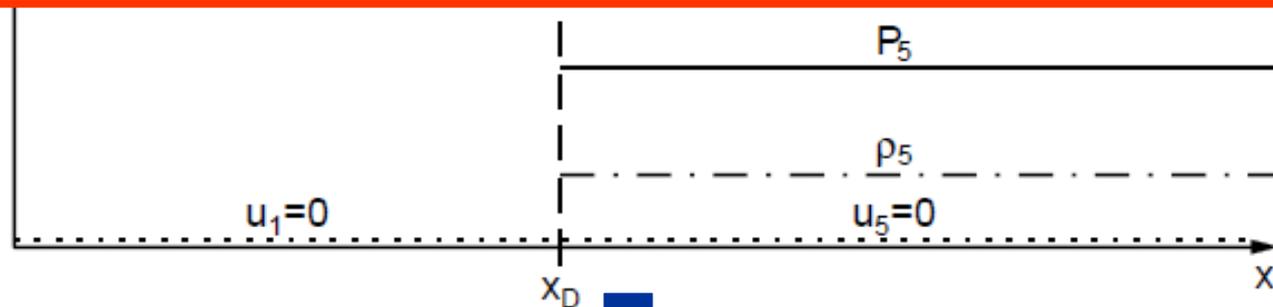
FS:3

CD:1)

Riemann Problem:

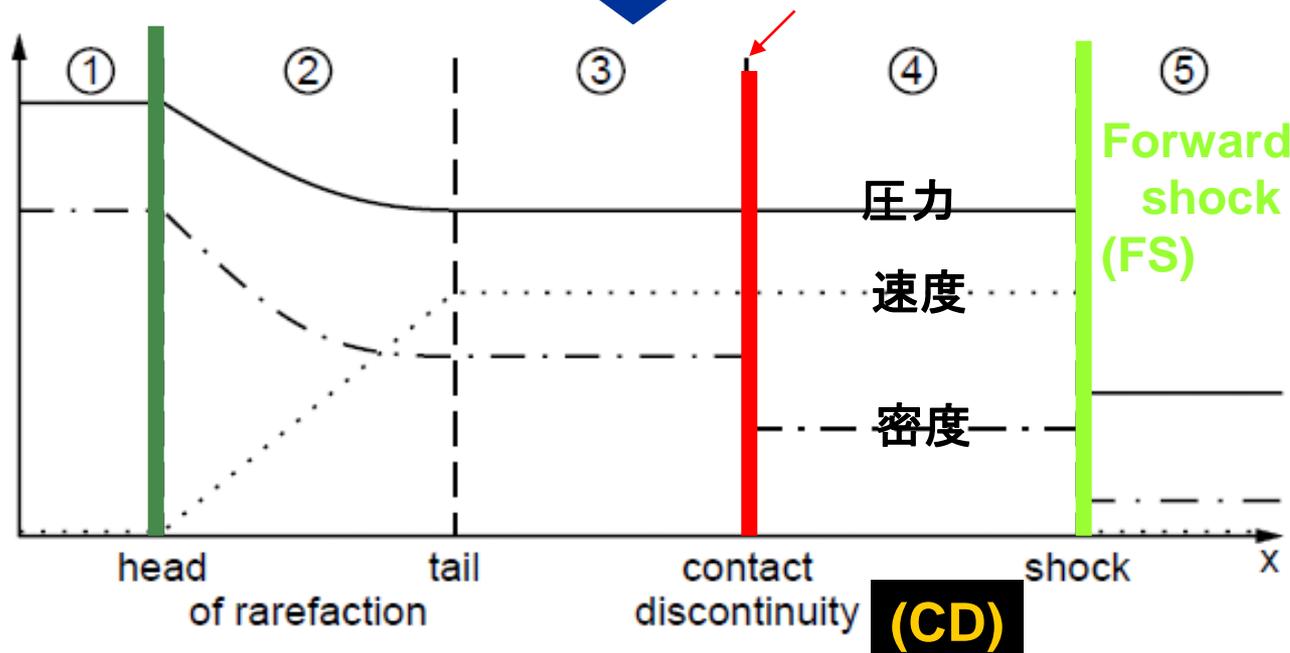
HIRSCH, C., "Numerical Computation of Internal and External Flows (Vol.2: Computational Methods for Inviscid and Viscous Flows)", A Wiley-Interscience Publication (1992).

ランダウ, リフシッツ, "流体力学 2", 東京図書, 1971.

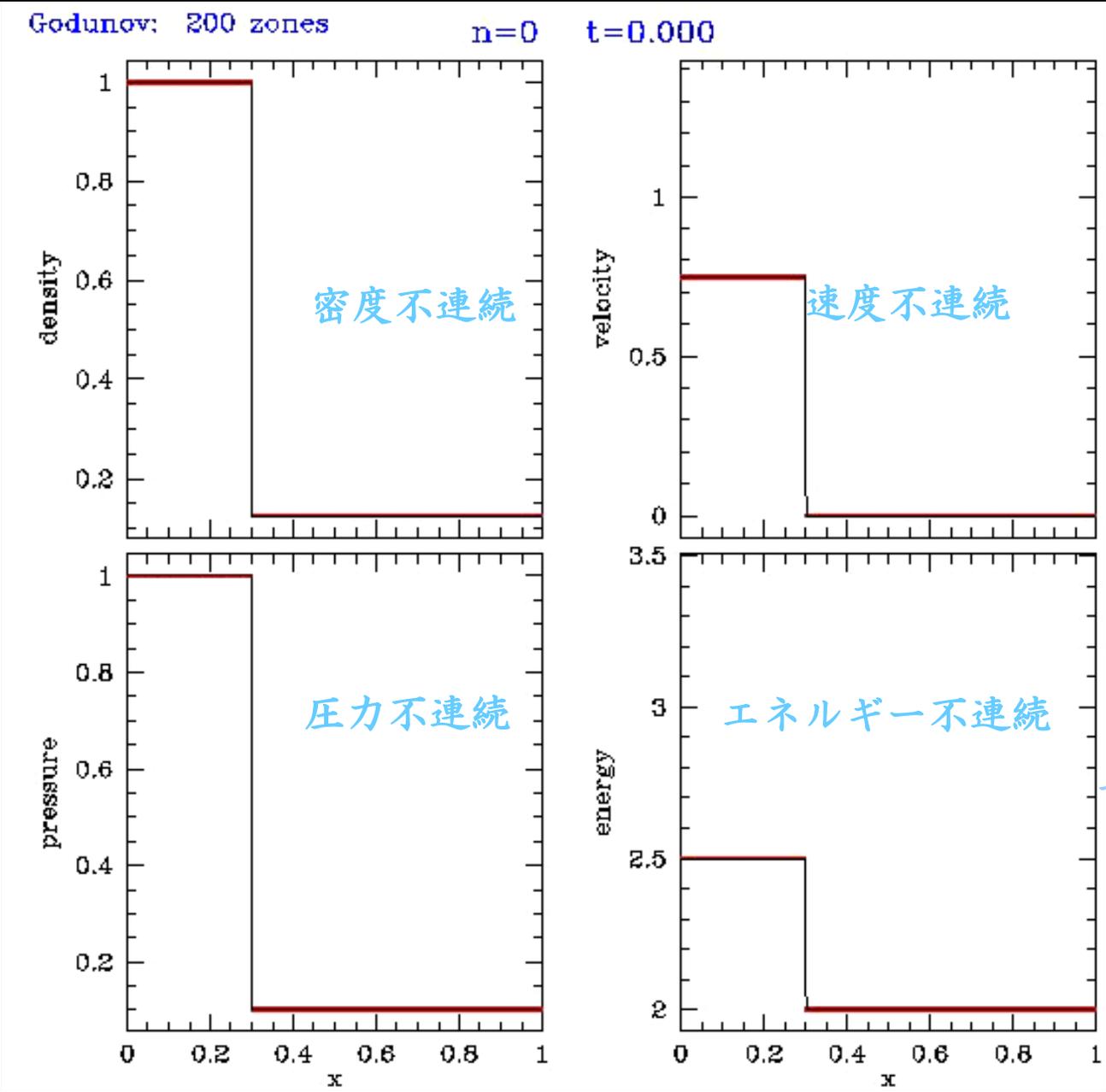


Reverse shock(RS)

接触不連続面(圧力、速度連続)



初期条件によって解の構造が異なる：Shock tube テスト



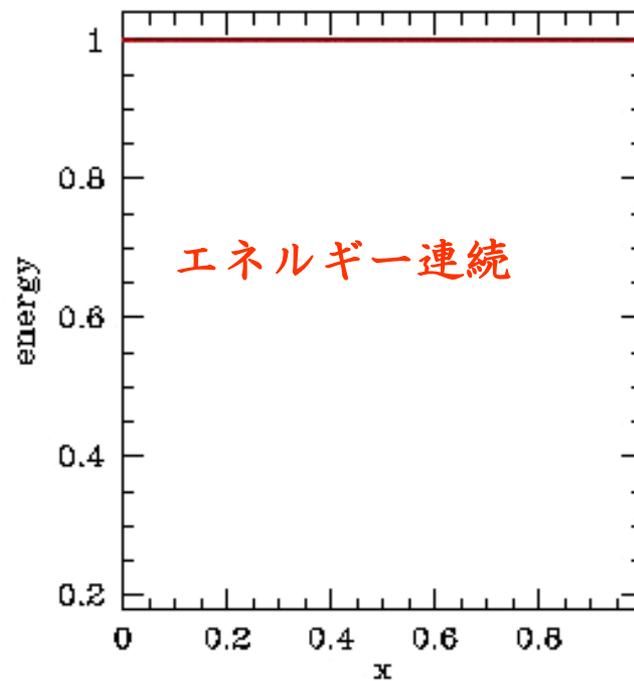
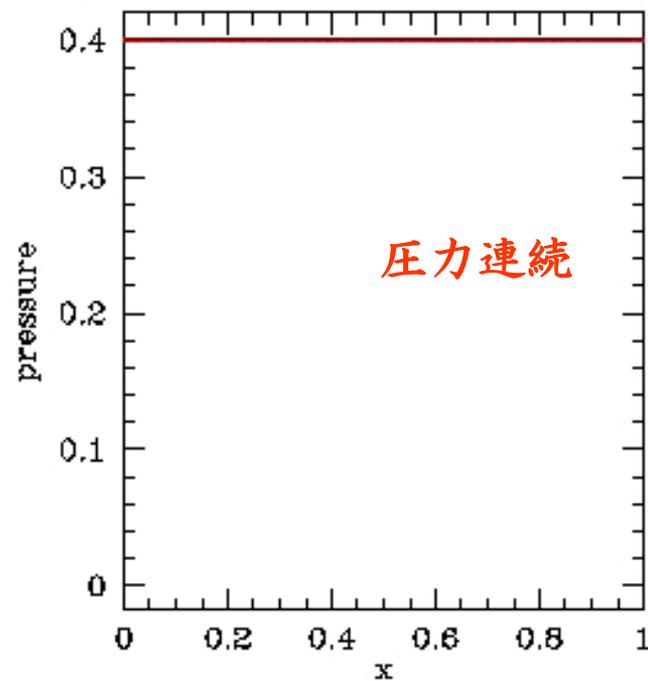
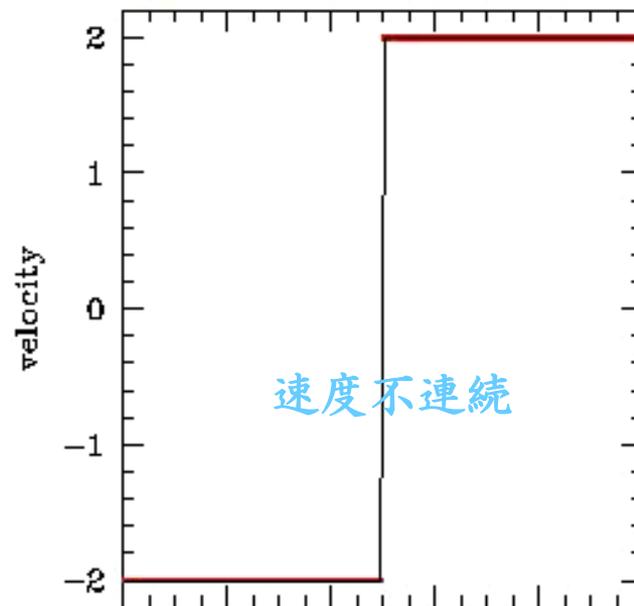
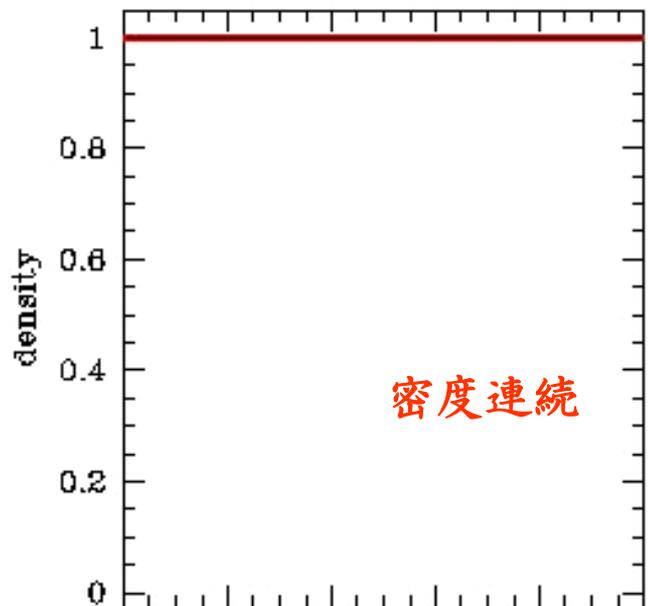
もつとも一般的な場合

青線：解析解

PFM: 100 zones

$n=0$

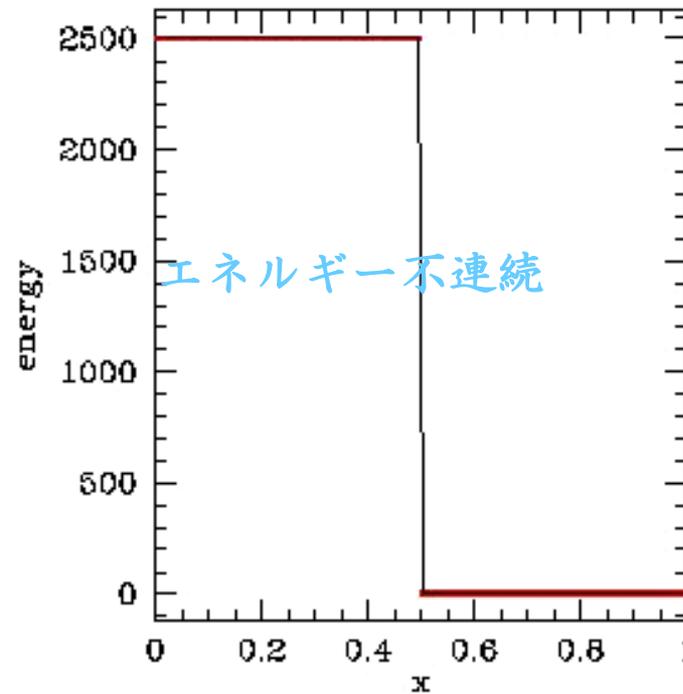
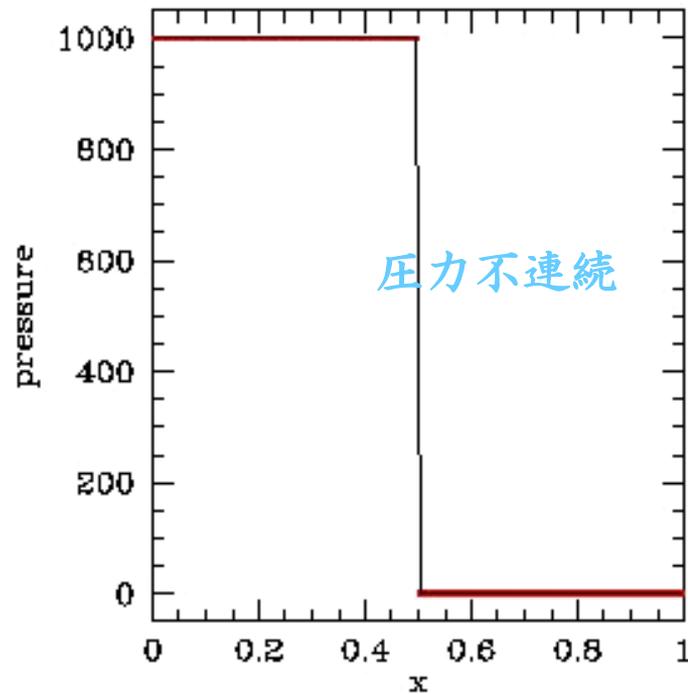
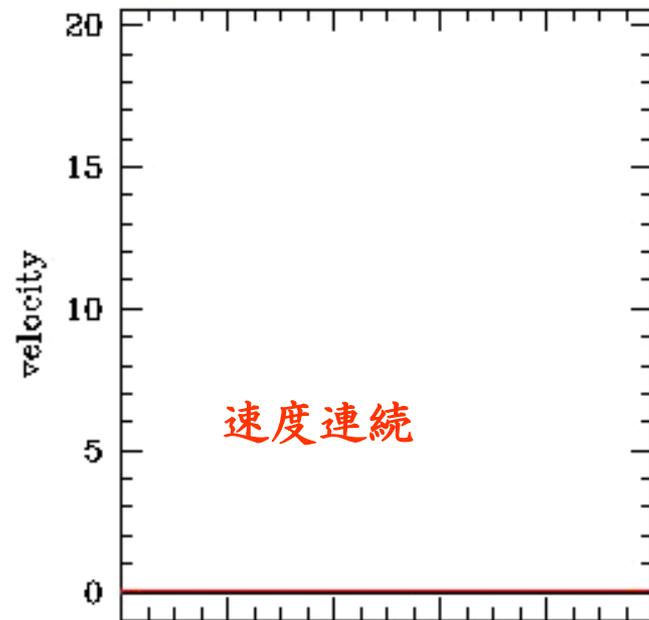
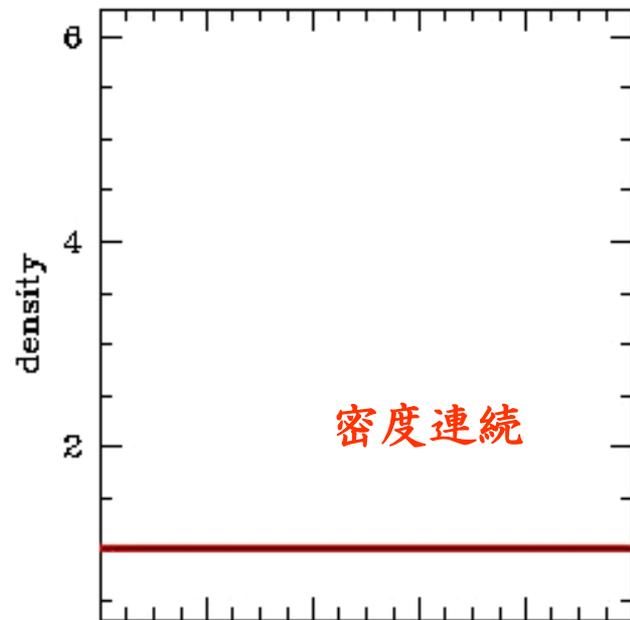
$t=0.000$



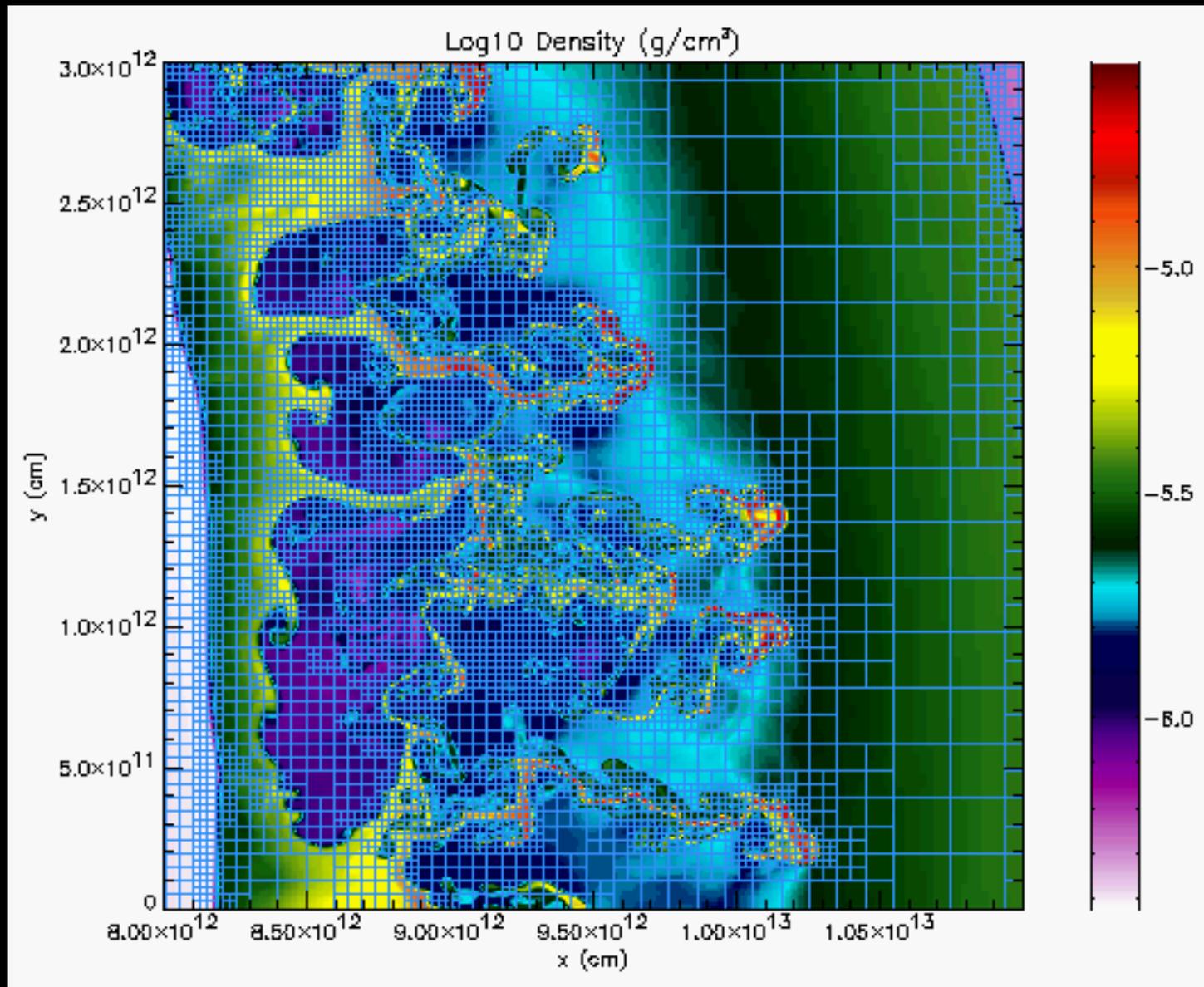
PFM: 100 zones

$n=0$

$t=0.000$



Adaptive mesh refinement 法(適合格子法) の一例 (Kifonidius et al. 2003 A&A)



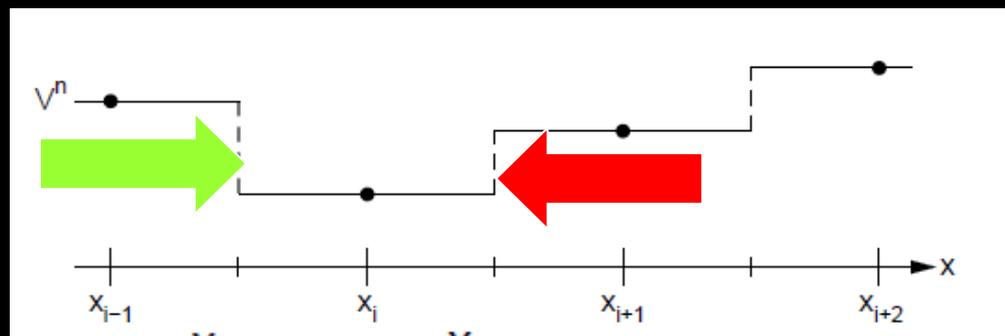
$$\mathbf{U}_t + \mathbf{F}(\mathbf{U})_x = 0$$

$$\mathbf{U} = \begin{pmatrix} \rho \\ \rho u \\ \rho E \end{pmatrix}$$

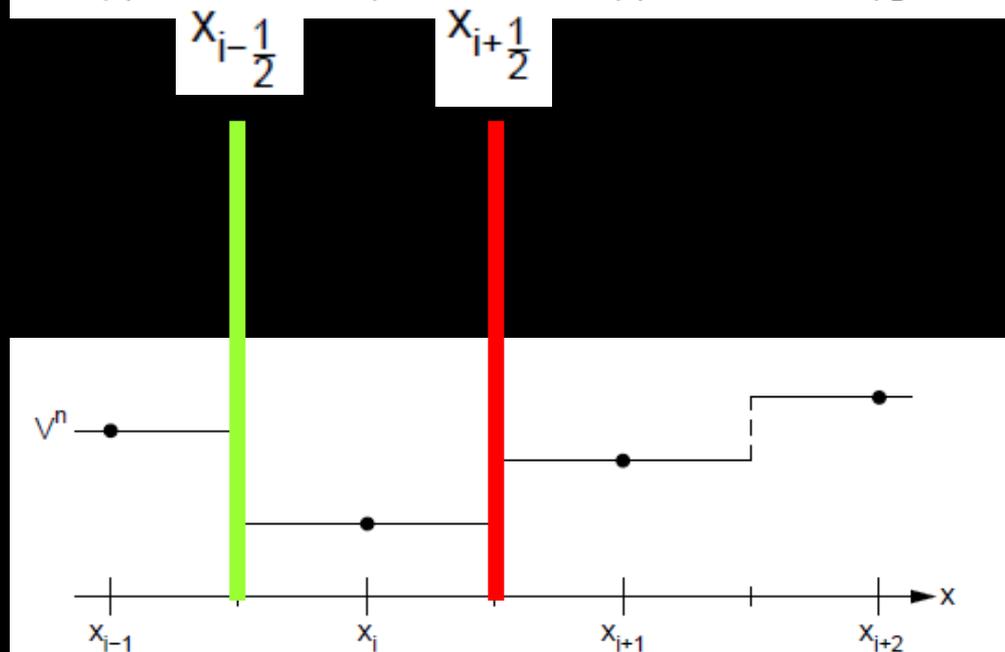
$$\mathbf{F}(\mathbf{U}) = \begin{pmatrix} \rho u \\ \rho u^2 + p \\ (\rho E + p)u \end{pmatrix}$$

差分の式にする。

$$\frac{U_i^{n+1} - U_i^n}{\Delta t} = - \frac{F_{i-1/2}^n - F_{i+1/2}^n}{\Delta x}$$



$$U_i^{n+1} = U_i^n + \frac{\Delta t}{\Delta x} (F_{x_{i-1/2}} - F_{x_{i+1/2}})$$



$$\mathbf{U}_t + \mathbf{F}(\mathbf{U})_x = 0$$

$$\mathbf{U} = \begin{pmatrix} \rho \\ \rho u \\ \rho E \end{pmatrix}$$

$$\mathbf{F}(\mathbf{U}) = \begin{pmatrix} \rho u \\ \rho u^2 + p \\ (\rho E + p)u \end{pmatrix}$$

差分の式にする。

$$\frac{U_i^{n+1} - U_i^n}{\Delta t} = - \frac{F_{i-1/2}^n - F_{i+1/2}^n}{\Delta x}$$

$$U_i^{n+1} = U_i^n + \frac{\Delta t}{\Delta x} (F_{x_{i-1/2}} - F_{x_{i+1/2}})$$

これらを求めるために、リーマン問題を解く！

精密・面倒

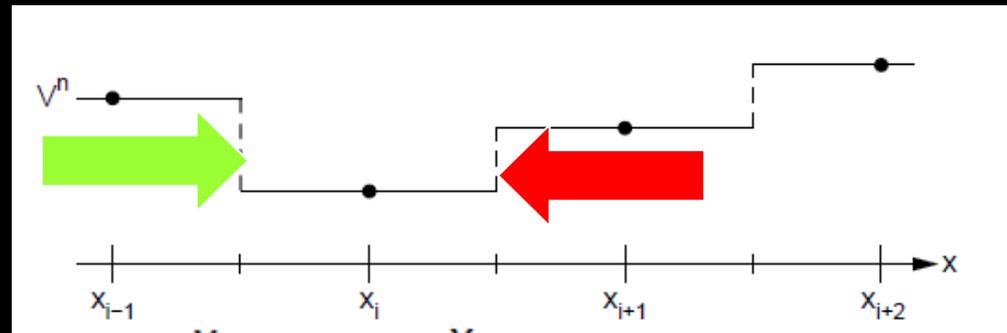
Godnov法 (厳密解)

Roe法 (振幅の滑らかな変化を無視)

HLLD・C法 (fast/slowを区別しない,alfven)

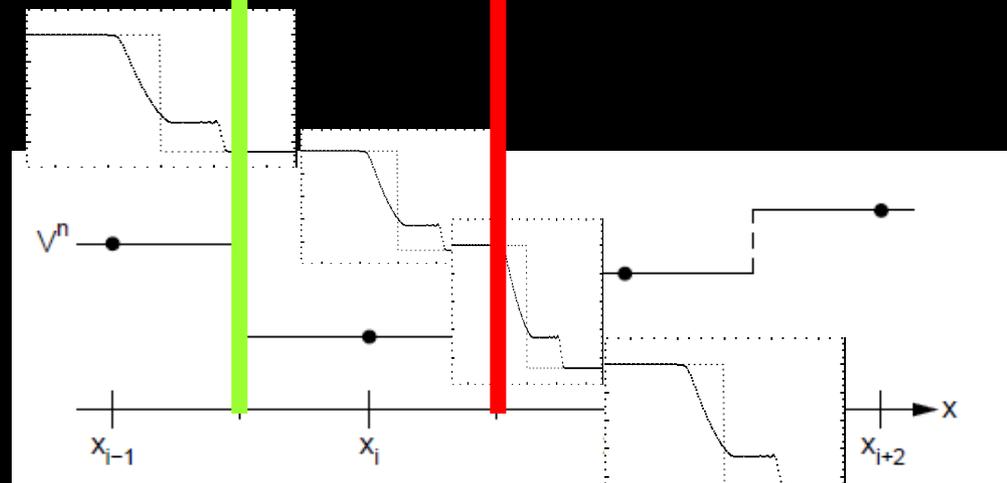
HLL法 (中間状態を一つだけ)

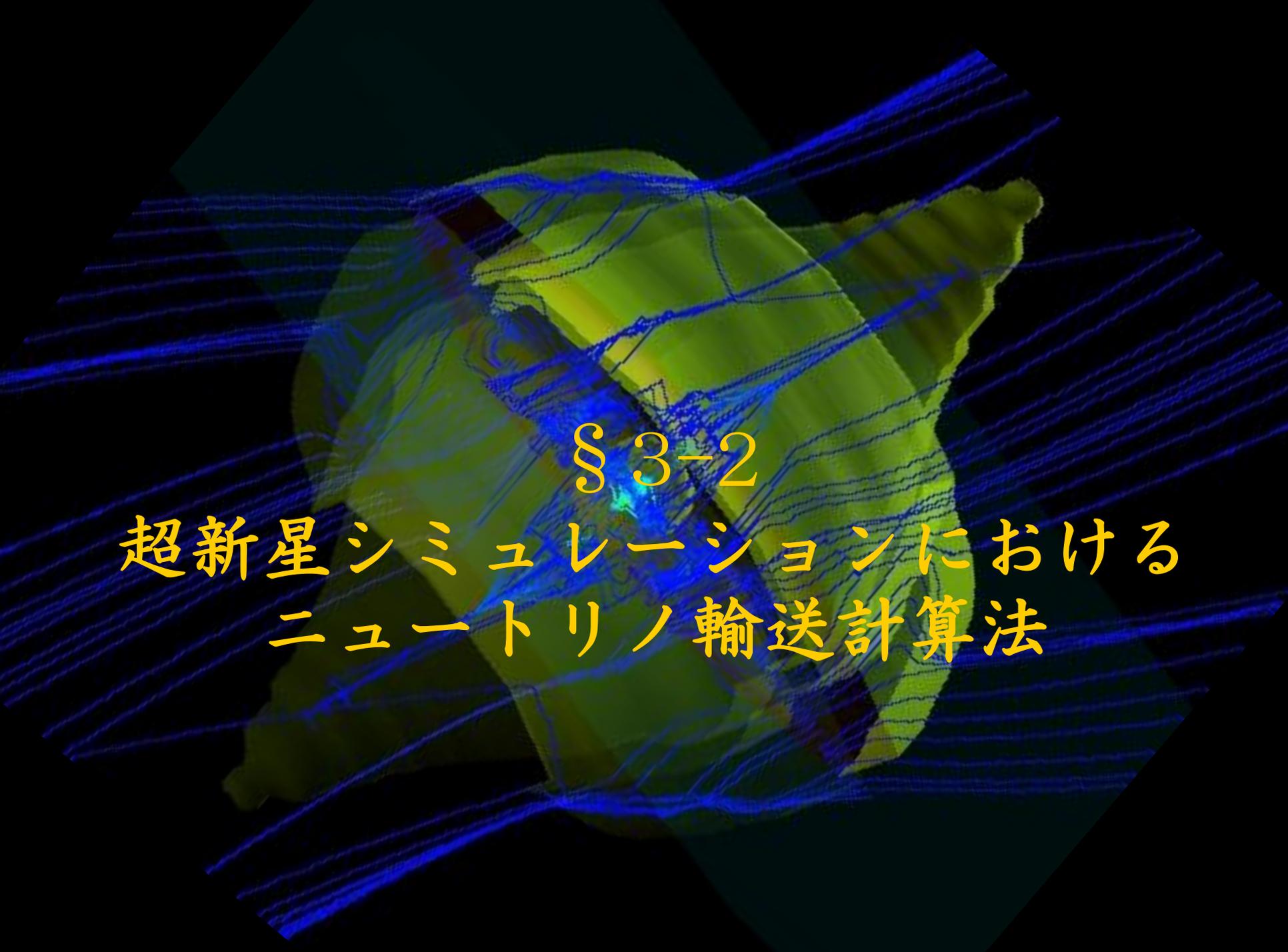
簡単・粘性大



$x_{i-1/2}$

$x_{i+1/2}$





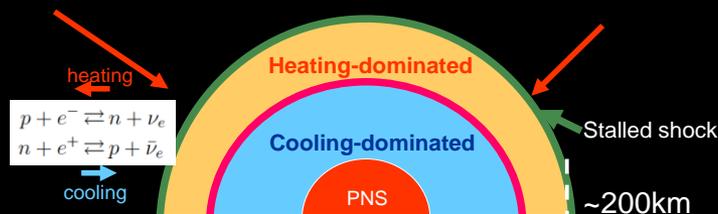
§ 3-2

超新星シミュレーションにおける
ニュートリノ輸送計算法

1回目のトラペから

✓ ニュートリノ放射パート:

Neutrino heating depends on neutrino luminosities, spectra, and angular distributions.



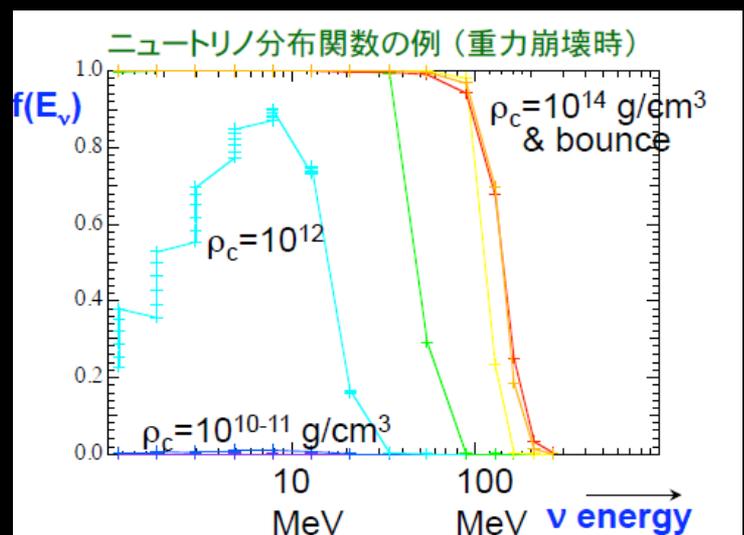
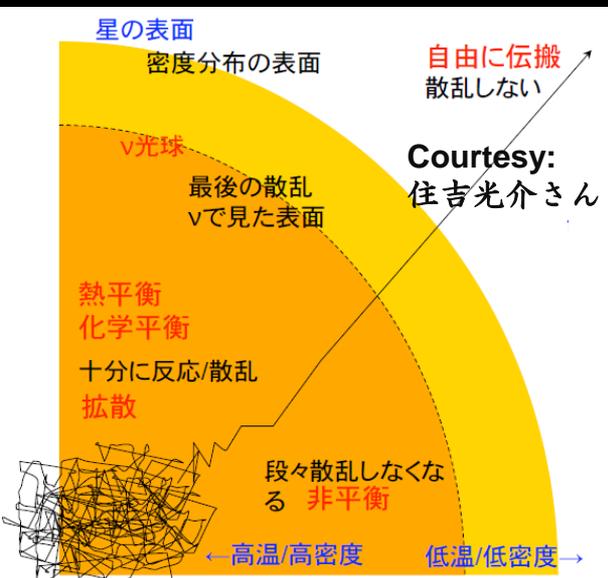
※ちなみに
 $f(t, x, y, z, p_x, p_y, p_z)$
 SN環境では、
 ニュートリノはmassless
 $E = cp$

$$\dot{\epsilon} = \frac{X_n}{\lambda_0} \frac{L_{\nu_c}}{4\pi r^2} \langle E_{\nu_c}^2 \rangle \langle \frac{1}{\mathcal{F}} \rangle + \frac{X_p}{\lambda_0} \frac{L_{\bar{\nu}_c}}{4\pi r^2} \langle E_{\bar{\nu}_c}^2 \rangle \langle \frac{1}{\mathcal{F}} \rangle$$

$f(t, r, \theta, \phi, E, \theta_p, \phi_p)$
 $E_R(t, r, \theta, \phi, E) = \int d\theta_p d\phi_p f$
 $E_R(t, r, \theta, \phi) = \int dE d\theta_p d\phi_p f$

“MGMA”(6 dimensional problem)
 “MG”(Multi energy-Group : エネルギー群)
) or **IDS**(isotropic diffusion source approximation)
 “Gray (no energy-dependence)”

(詳細については第3回目で)



✓ **ニュートリノ分布関数**
 ごく中心部を除いて
熱分布(Fermi-Dirac分布)
 ではない。
 $f_\nu(E_\nu) = \frac{1}{\exp(E_\nu - \mu_\nu)/k_B T + 1}$
 ⇒
 少なくとも、
Energy依存性を残した
放射輸送計算が不可欠
(multi-energy group輸送)
(エネルギー多群輸送)

解くべきはBoltzmann equation

$$\frac{\partial f_\nu}{\partial t} + \frac{d\vec{r}}{dt} \cdot \frac{\partial f_\nu}{\partial \vec{r}} + \frac{d\vec{p}}{dt} \cdot \frac{\partial f_\nu}{\partial \vec{p}} = \frac{df_\nu}{dt} \Big|_{\text{coll}}$$

左辺：ニュートリノ数の変動

右辺：衝突項(Collisional term)
反応によるニュートリノ数の変動

✓超新星コードにマイクロ物理を入れるロードマップ

Easy

(1) Simple deleptonization: 「Ye処方」(Ye(p)で電子捕獲を扱う)

(2) Neutrino leakage scheme: 「ニュートリノ漏れ出し法」

(ニュートリノ冷却のみ近似的に扱う)

(3) Simple deleptonization + Light-bulb treatment: 「ライトバルブ近似」

(ニュートリノ加熱を手で入れる)

(4) Single energy flux-limited diffusion: 「グレイ輸送」 $f_\nu(t, r, \theta, \phi)$

(5) Multi-energy flux-limited diffusion: 「マルチグループ輸送+FLD」

Isotropic Diffusion Source Approximation (IDSA) $f_\nu(t, r, \theta, \phi, E_\nu)$

(5') Ray-by-ray Boltzmann transport: 「マルチグループ輸送+α」 $f_\nu(t, r, \theta, \phi, E_\nu, \theta_\nu)$

(6) Multi-angle Boltzmann transport: 「マルチエネルギー・マルチアングル輸送」

$f_\nu(t, r, \theta, \phi, E_\nu, \theta_\nu, \phi_\nu)$

Hard

解くべきは Boltzmann equation

$$\left. \frac{\partial f_\nu}{\partial t} + \frac{d\vec{r}}{dt} \cdot \frac{\partial f_\nu}{\partial \vec{r}} + \frac{d\vec{p}}{dt} \cdot \frac{\partial f_\nu}{\partial \vec{p}} = \frac{df_\nu}{dt} \right|_{\text{coll}}$$



✓ 超新星コードにマイクロ物理を入れるロードマップ

Easy

6 months
Only if your hydro is robust

Simple deleptonization

ニュートリノクーリングのみ入る

Neutrino leakage scheme

Simple deleptonization + Light-bulb treatment

ニュートリノ加熱が「手」で入る。

Single energy flux-limited diffusion

✓ ニュートリノ加熱・冷却がパラメータなしに入る

Multi-energy flux-limited diffusion, Isotropic Diffusion Source Approximation

✓ ただ陰的解法が不可欠 (implicit scheme)

Ray-by-ray Boltzmann transport

Multi-angle Boltzmann transport

> 1 year (or a life work!)

Hard

✓ Ye 処方

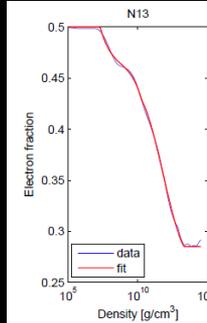
球対称ボルツマン輸送計算から得られた $Y_e(\rho)$ の fitting formula を使う。

(Pros) Very easy to implement.

(often employed in GR simulations:
Dimmelmeier et al. (2007), Ott et al. (2008))

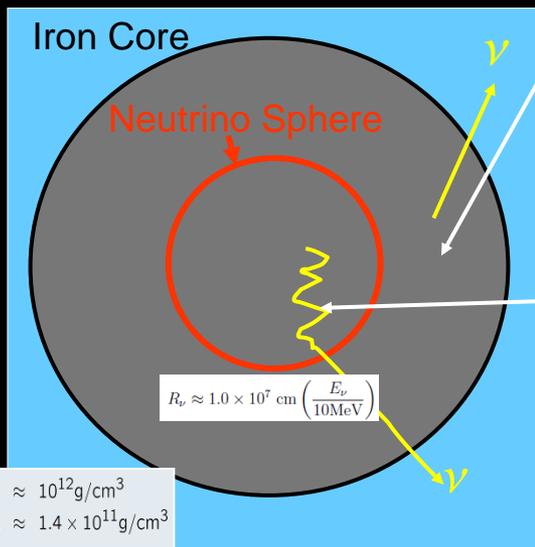
$$Y_e(x) = \frac{1}{2}(Y_2 + Y_1) + \frac{x}{2}(Y_2 - Y_1) + Y_c [1 - |x| + 4|x|(|x| - 1/2)(|x| - 1)].$$

$$x(\rho) = \max \left[-1, \min \left(1, \frac{2 \log \rho - \log \rho_2 - \log \rho_1}{\log \rho_2 - \log \rho_1} \right) \right]$$



(Cons) バウンス前しか使えない。
親星が違ふ時の妥当性。
球対称のシステムのみ有効。

✓ Neutrino leakage scheme (NLS) (van Riper 1981, Bludman et al. 1981, Rosswog & Liebendoerfer 2003, Kotake et al. 2003)



- Outside the neutrino sphere, neutrinos are assumed to vanish instantaneously.

$$\frac{dY_e}{dt} = \Gamma_{e\text{-capture}} \quad \text{assuming } Y_\nu = 0$$

- Inside the neutrino sphere, the beta equilibrium is assumed.

$$Y_l = Y_e - Y_{\nu_e} + Y_{\bar{\nu}_e}$$

$$\frac{dY_l}{dt} = -\frac{Y_{\nu_e}}{\tau_{\text{esc}}(\epsilon_{\nu_e})} + \frac{Y_{\bar{\nu}_e}}{\tau_{\text{esc}}(\epsilon_{\bar{\nu}_e})}$$

$$\frac{de}{dt} = -\epsilon_{\nu_e} \frac{Y_{\nu_e}}{\tau_{\text{esc}}(\epsilon_{\nu_e})} - \epsilon_{\bar{\nu}_e} \frac{Y_{\bar{\nu}_e}}{\tau_{\text{esc}}(\epsilon_{\bar{\nu}_e})}$$

$$\begin{aligned} \rho_{\text{center}} &\approx 10^{12} \text{g/cm}^3 \\ \rho_{\text{trap}} &\approx 1.4 \times 10^{11} \text{g/cm}^3 \end{aligned}$$

✓ Ye 処方

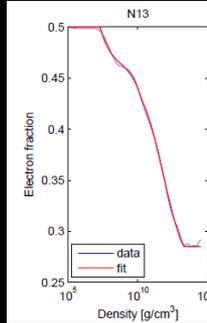
球対称ボルツマン輸送計算から得られた $Y_e(\rho)$ のfitting formulaを使う。

(Pros) Very easy to implement.

(often employed in GR simulations:
Dimmelmeier et al. (2007), Ott et al. (2008))

$$Y_e(x) = \frac{1}{2}(Y_2 + Y_1) + \frac{x}{2}(Y_2 - Y_1) + Y_c [1 - |x| + 4|x|(|x| - 1/2)(|x| - 1)].$$

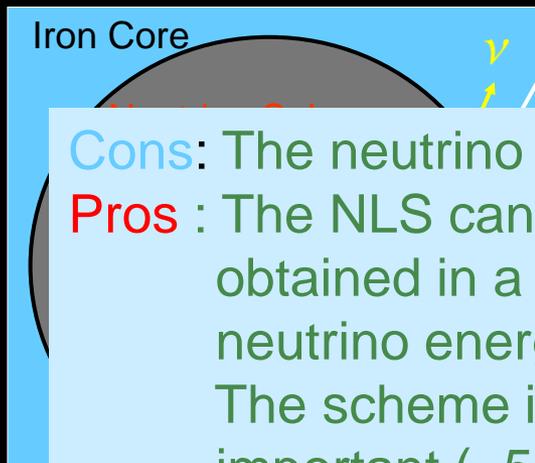
$$x(\rho) = \max \left[-1, \min \left(1, \frac{2 \log \rho - \log \rho_2 - \log \rho_1}{\log \rho_2 - \log \rho_1} \right) \right]$$



(Cons) バウンス前しか使えない。
親星が違ふ時の妥当性。
球対称のシステムのみ有効。

✓ Neutrino leakage scheme (NLS) (van Riper 1981, Bludman et al. 1981, Rosswog & Liebendoerfer 2003, Kotake et al. 2003)

- Outside the neutrino sphere, neutrinos are assumed to vanish instantaneously.



Cons: The neutrino heating cannot be treated.

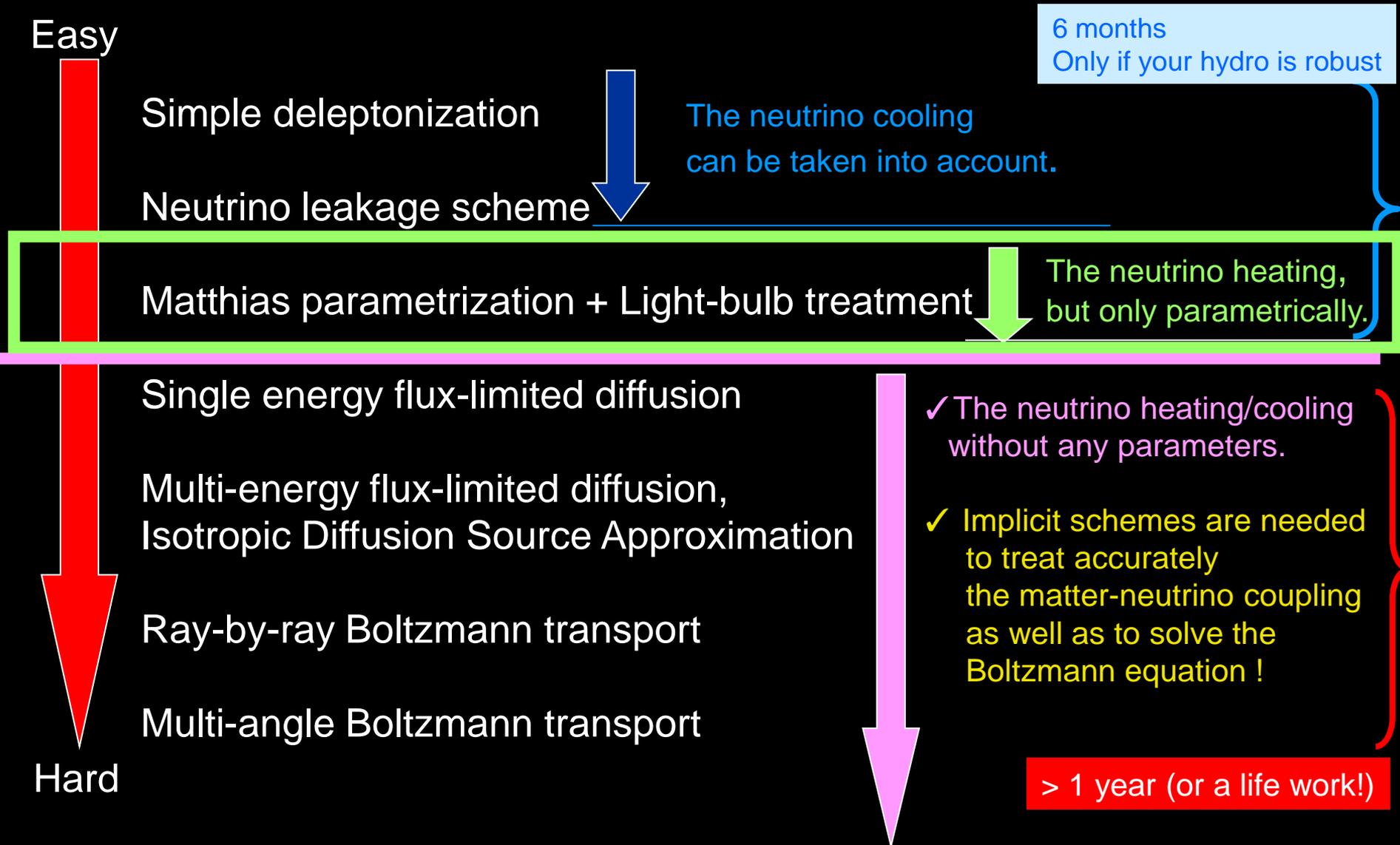
Pros: The NLS can reproduce important features obtained in a Boltzmann simulation, like evolution of neutrino energy, luminosity, etc, to some extent. The scheme is valid only before the neutrino heating becomes important (~50 ms after bounce).

$\rho_{\text{center}} \approx 1$
 $\rho_{\text{trap}} \approx 1.4 \times 10^{11} \text{g/cm}^3$

ed.

$\bar{\nu}_e$
 $(\epsilon_{\bar{\nu}_e})$

Roadmap to implement the supernova microphysics to your code!



Easy

6 months
Only if your hydro is robust

Simple deleptonization
Neutrino leakage scheme

The neutrino cooling
can be taken into account.

Matthias parametrization + Light-bulb treatment

The neutrino heating,
but only parametrically.

Single energy flux-limited diffusion

✓ The neutrino heating/cooling
without any parameters.

Multi-energy flux-limited diffusion,
Isotropic Diffusion Source Approximation

✓ Implicit schemes are needed
to treat accurately
the matter-neutrino coupling
as well as to solve the
Boltzmann equation !

Ray-by-ray Boltzmann transport

Multi-angle Boltzmann transport

Hard

> 1 year (or a life work!)

✓ Matthias' recipe + light-bulb method

(Scheck et al. 04, Ohnishi et al. 07, Murphy & Burrows 08, Nordhaus et al. 10)

ライト・バルブ法:

原子中性子星から照らされる
ニュートリノ光度を手で与える。
(type I simulation でよくつかわれる)

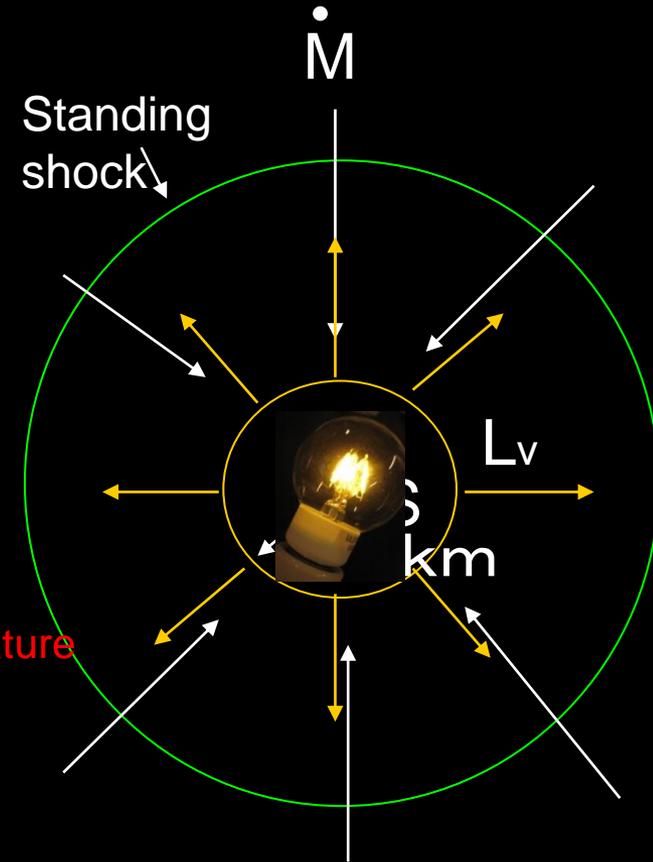
$$\partial_t (\rho E) = -\nabla \cdot (\rho \mathbf{u} E) + p \mathbf{u} + \rho \mathbf{u} \cdot \mathbf{g} + \rho (\mathcal{H} - \mathcal{C})$$

$$\mathcal{H} = 1.544 \times 10^{20} \left(\frac{L_{\nu_e}}{10^{52} \text{ erg s}^{-1}} \right) \left(\frac{T_{\nu_e}}{4 \text{ MeV}} \right)^2 \times \left(\frac{100 \text{ km}}{r} \right)^2 (Y_n + Y_p) e^{-\tau_{\nu_e}} \left[\frac{\text{erg}}{\text{g s}} \right]$$

and

$$\mathcal{C} = 1.399 \times 10^{20} \left(\frac{T}{2 \text{ MeV}} \right)^6 (Y_n + Y_p) e^{-\tau_{\nu_e}} \left[\frac{\text{erg}}{\text{g s}} \right]$$

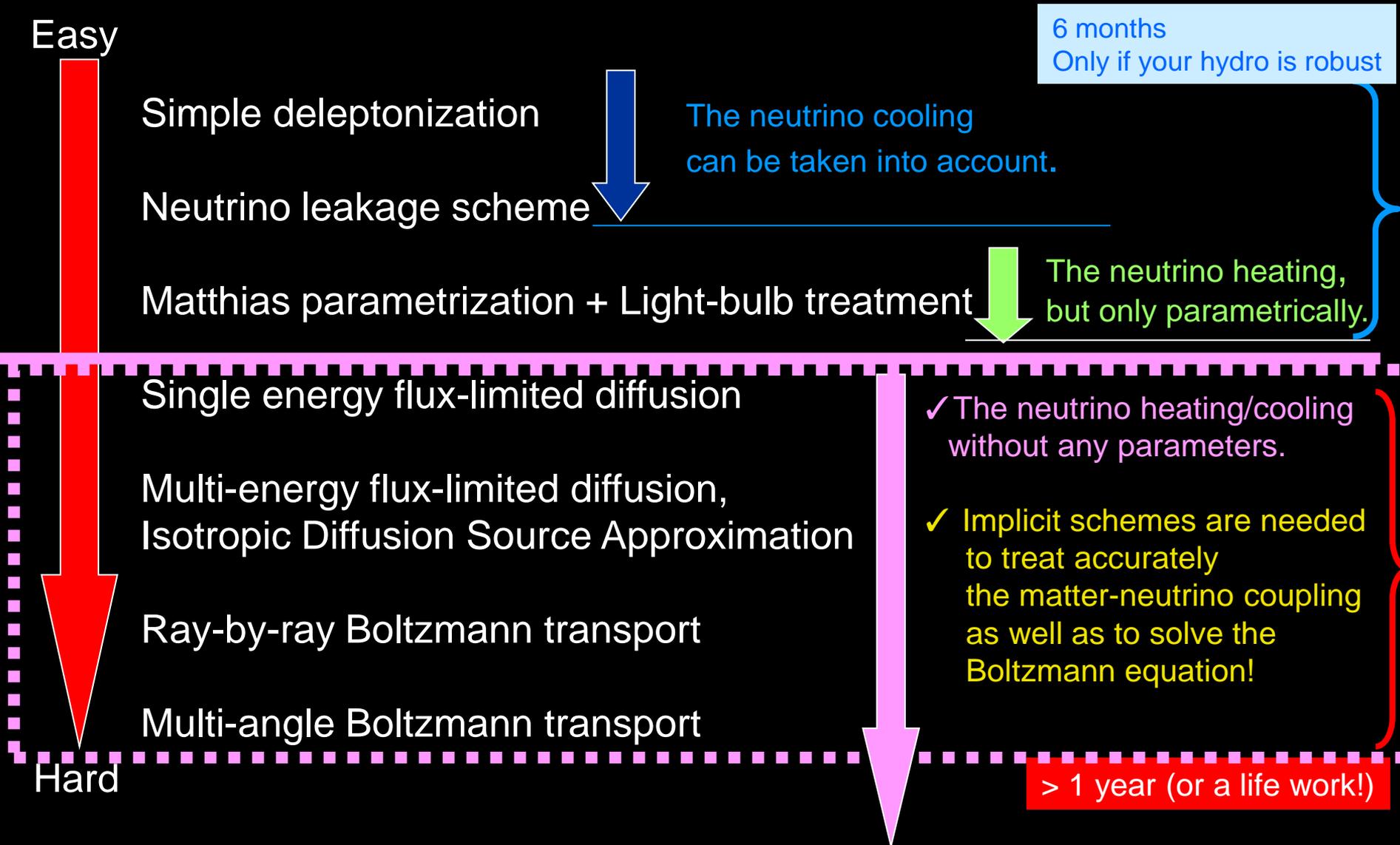
Neutrino temperature given by hand.



(Pros): Qualitative effects of neutrino heating on convection or hydrodynamic instability can be studied.

(Cons): The neutrino heating is completely an input parameter !

Roadmap to implement the supernova microphysics to your code!



Why implicit scheme (陰解法) is needed ?



j : emissivity
 λ : absorptivity

$$\frac{\partial f_\nu}{\partial t} = j_{\text{emit}} (1 - f_\nu) - \frac{1}{\lambda_{\text{abs}}} f_\nu = j_{\text{emit}} \left(1 - \frac{f_\nu}{f_\nu^{\text{eq}}} \right)$$

Note that $1/\lambda^{(a)}(\omega) = \exp\{\beta[\omega - (\mu_p + \mu_e - \mu_n)]\} j(\omega)$

If solved explicitly,...

$$\frac{f^{n+1} - f^n}{\Delta t} = j \left(1 - \frac{f^n}{f^{\text{eq}}} \right)$$

$$f^{n+1} = f^n + j \left(1 - \frac{f^n}{f^{\text{eq}}} \right) \Delta t$$

$$\tau_{\text{weak}} < 1\mu\text{sec} \ll \tau_{\text{dyn}} \sim 1\text{msec}$$

$$\Delta t \rightarrow \infty : f^{n+1} \rightarrow \infty$$

The implicit treatment is stable !

$$\frac{f^{n+1} - f^n}{\Delta t} = j \left(1 - \frac{f^{n+1}}{f^{\text{eq}}} \right)$$

$$f^{n+1} = \frac{f^n + j \Delta t}{1 + \frac{j}{f^{\text{eq}}} \Delta t}$$

$$\Delta t \rightarrow \infty : f^{n+1} \rightarrow f^{\text{eq}}$$

ボルツマン方程式の右辺：「衝突項」の計算法

$$\left(\frac{df}{cdt}\right)_{\text{coll}} = B_{\text{AE}} + B_{\text{NES}} + B_{\text{IS}} + B_{\text{TP}}$$

Neutrino interactions Correspondence to Eq. (1.29)



Emission and absorption

$$B_{\text{AE}} = j(1 - f) - f/\lambda^a,$$

<O(100) MeV

等エネルギー散乱 ($M_{\text{nuc}} \sim 1 \text{ GeV} \gg E \nu$)

$$B_{\text{IS}} = \frac{1}{c(2\pi\hbar c)^3} \omega^2 \int_{-1}^1 d\mu' \int_0^{2\pi} d\phi R_{\text{IS}}^0(\omega, \omega', \cos\theta) [f(\mu', \omega') - f(\mu, \omega)],$$

非弾性散乱 inelastic

$$B_{\text{NES}} = [1 - f] \frac{1}{c(2\pi\hbar c)^3} \int_0^\infty \omega'^2 d\omega' \int_{-1}^1 d\mu' f(\mu', \omega') \int_0^{2\pi} d\phi R_{\text{NES}}^{\text{in}}(\omega, \omega', \cos\theta) - f \frac{1}{c(2\pi\hbar c)^3} \int_0^\infty \omega'^2 d\omega' \int_{-1}^1 d\mu' [1 - f(\mu', \omega')] \int_0^{2\pi} d\phi R_{\text{NES}}^{\text{out}}(\omega, \omega', \cos\theta),$$

ペア反応

$$B_{\text{TP}} = [1 - f] \frac{1}{c(2\pi\hbar c)^3} \int_0^\infty \omega'^2 d\omega' \int_{-1}^1 d\mu' \int_0^{2\pi} d\phi R_{\text{TP}}^p(\omega, \omega', \cos\theta) [1 - \bar{f}(\mu', \omega')] - f \frac{1}{c(2\pi\hbar c)^3} \int_0^\infty \omega'^2 d\omega' \int_{-1}^1 d\mu' \int_0^{2\pi} d\phi R_{\text{TP}}^a(\omega, \omega', \cos\theta) \bar{f}(\mu', \omega'), \quad (1.34)$$

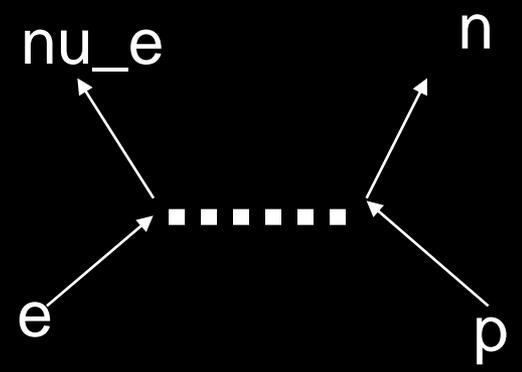


(Bruenn 1985, ApJS)

emission

$$B_{AE} = j(1 - f) - f/\lambda^a$$

j: emissivity
λ: absorptivity



The matrix element:

$$M = \frac{G}{\sqrt{2}} \bar{u}_p(p_p) \gamma^\mu (g_V - g_A \gamma_5) u_n(p_n) \bar{u}_e(p_e) \gamma_\mu (1 - \gamma_5) u_\nu(q)$$

See e.g., Bjorken & Donell

$$r = \frac{G^2}{\omega E_e E_p E_n} (2\pi)^4 \delta^4(q + p_n - p_e - p_p) \left[(g_V + g_A)^2 p_p \cdot p_e p_n \cdot q + (g_V - g_A)^2 p_p \cdot q p_n \cdot p_e - (g_V^2 - g_A^2) M_n M_p p_e \cdot q \right]$$

$$\left\{ \begin{array}{l} j(\omega) \\ 1/\lambda^{(a)}(\omega) \end{array} \right\} = \int \frac{d^3 p_p}{(2\pi)^3} \int \frac{d^3 p_n}{(2\pi)^3} \int \frac{d^3 p_e}{(2\pi)^3} \left\{ \begin{array}{l} 2F_p(E_p)[1 - F_n(E_n)]2F_e(E_e)r(p_p + p_e \rightarrow p_n + q) \\ [1 - F_p(E_p)]2F_n(E_n)[1 - F_e(E_e)]r(p_n + q \rightarrow p_p + p_e) \end{array} \right\}$$

$$j(\omega) = \frac{G^2}{\pi} \eta_{pn} (g_V^2 + 3g_A^2) F_e(\omega + Q) (\omega + Q)^2 \left[1 - \frac{M_e^2}{(\omega + Q)^2} \right]^{1/2}$$

$$1/\lambda^{(a)}(\omega) = \frac{G^2}{\pi} \eta_{np} (g_V^2 + 3g_A^2) [1 - F_e(\omega + Q)] (\omega + Q)^2 \left[1 - \frac{M_e^2}{(\omega + Q)^2} \right]^{1/2}$$

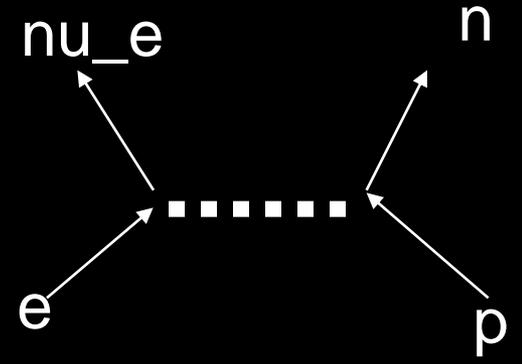
(Bruenn 1985, ApJS)



emission

$$B_{AE} = j(1 - f) - f/\lambda^a$$

j : emissivity
 λ : absorptivity



The matrix element:

$$M = \frac{G}{\sqrt{2}} \bar{u}_p(p_p) \gamma^\mu (g_V - g_A \gamma_5) u_n(p_n) \bar{u}_e(p_e) \gamma_\mu (1 - \gamma_5) u_\nu(q)$$

See e.g., Bjorken & Donell

$$r = \frac{G^2}{\omega E_e E_p E_n} (2\pi)^4 \delta^4(q + p_n - p_e - p_p) \left[(g_V + g_A)^2 p_p \cdot p_e p_n \cdot q + (g_V - g_A)^2 p_p \cdot q p_n \cdot p_e - (g_V^2 - g_A^2) M_n M_p p_e \cdot q \right]$$

$$\left\{ \begin{array}{l} j(\omega) \\ 1/\lambda^{(a)}(\omega) \end{array} \right\} = \int \frac{d^3 p_p}{(2\pi)^3} \int \frac{d^3 p_n}{(2\pi)^3} \int \frac{d^3 p_e}{(2\pi)^3} \left\{ \begin{array}{l} 2F_p(E_p)[1 - F_n(E_n)]2F_e(E_e)r(p_p + p_e \rightarrow p_n + q) \\ [1 - F_p(E_p)]2F_n(E_n)[1 - F_e(E_e)]r(p_n + q \rightarrow p_p + p_e) \end{array} \right\}$$

$$j(\omega) = \frac{G^2}{\pi} \eta_{pn} (g_V^2 + 3g_A^2) F_e(\omega + Q) (\omega + Q)^2 \left[1 - \frac{M_e^2}{(\omega + Q)^2} \right]^{1/2}$$

- ✓ ボルツマン方程式の右辺は頑張って計算できる。
- ✓ ボルツマン方程式を解くためには、もうひとつのキーポイントが...

$$1/\lambda^{(a)}(\omega) = \frac{G^2}{\pi} \eta_{np} (g_V^2 + 3g_A^2) [1 - F_e(\omega + Q)] (\omega + Q)^2 \left[1 - \frac{M_e^2}{(\omega + Q)^2} \right]^{1/2}$$

ボルツマン方程式の階層構造

$$\frac{\partial}{\partial t} f + \frac{dr}{dt} \nabla_r f + \frac{dp}{dt} \nabla_p f = \left(\frac{df}{dt} \right)^{\text{coll.}}$$

外力が加わっていない場合 $\dot{p} \equiv 0$

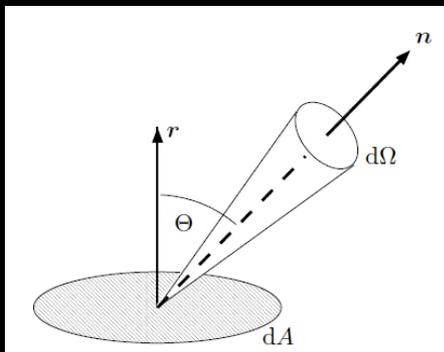
$$\frac{1}{c} \frac{\partial}{\partial t} f + n \nabla_r f = B$$

Specific intensity を定義する。

$$\mathcal{I} := \left(\frac{\epsilon}{hc} \right)^3 c \cdot f$$

$$\mathcal{I}(t, \mathbf{r}, \epsilon, \mathbf{n}) d\Omega d\epsilon n r / |\mathbf{r}| dA dt$$

輻射が単位立体角、単位エネルギー、ある方向、 dA 、 dt を通過する確率になる



Intensity の角度モーメント量

✓ ゼロ次 \Rightarrow radiation energy

$$J(t, \mathbf{r}, \epsilon) := \frac{1}{4\pi} \int d\Omega \mathcal{I}(t, \mathbf{r}, \epsilon, \mathbf{n}) = \frac{c}{4\pi} E(t, \mathbf{r}, \epsilon) \quad (\text{scalar})$$

✓ 1次 \Rightarrow radiation flux (輻射フラックス)

$$H_i(t, \mathbf{r}, \epsilon) := \frac{1}{4\pi} \int d\Omega n_i \mathcal{I}(t, \mathbf{r}, \epsilon, \mathbf{n}) = \frac{1}{4\pi} F_i(t, \mathbf{r}, \epsilon) \quad (\text{vector})$$

✓ 2次 \Rightarrow radiation pressure (輻射圧)

$$K_{ij}(t, \mathbf{r}, \epsilon) := \frac{1}{4\pi} \int d\Omega n_i n_j \mathcal{I}(t, \mathbf{r}, \epsilon, \mathbf{n}) = \frac{c}{4\pi} P_{ij}(t, \mathbf{r}, \epsilon) \quad (\text{tensor})$$

ボルツマン方程式の角度モーメント量

$$\frac{1}{c} \frac{\partial}{\partial t} J + \nabla \cdot \mathbf{H} = S^{(0)} \quad (0^{\text{th}}\text{-order moment equation})$$

$$\frac{1}{c} \frac{\partial}{\partial t} \mathbf{H} + \nabla \cdot \mathbf{K} = S^{(1)} \quad (1^{\text{st}}\text{-order moment equation})$$

⋮

どこまで行っても閉じない。

✓ Closure することが必要

- (1) Flux limited diffusion 法 (流速制限法)
- (2) M1 closure
- (3) Variable Eddington factor 法

ボルツマン方程式の解法(1/3)

Bruenn et al. 1985, Livne et al. 2005, Kotake et al. 2006

$$\partial_t E_\nu + \nabla F_\nu = Q_\nu^0 \quad (0^{\text{th}}\text{-order moment equation})$$

$$\partial_t F_\nu + \nabla P_\nu = Q_\nu^1 \quad (1^{\text{st}}\text{-order moment equation})$$

✓ 流速制限法 (Flux-Limited-Diffusion)

$$f_\nu(t, m, \omega, \mu) = f_\nu^{(0)}(t, m, \omega) + f_\nu^{(1)}(t, m, \omega)\mu$$

輻射は等方的と近似、等方からのずれの一次を入れる

Fickの法則から以下を仮定

$$F_\nu(\omega) = -\frac{c\lambda_\nu}{3} \left(\frac{\partial}{\partial r} u_\nu(\omega) \right)$$

$$F_\nu(\omega) = -\frac{c\Lambda_\nu}{3} \left(\frac{\partial}{\partial r} u_\nu(\omega) \right)$$

$$\lambda_\nu \rightarrow \infty \text{ で } F_\nu > u_\nu c$$

Flux limiter

$$\Lambda_\nu \equiv \frac{3}{3 + \lambda_\nu \frac{|\frac{\partial u_\nu}{\partial r}|}{u_\nu}} \cdot \lambda_\nu$$

$$\lambda \rightarrow 0 \text{ で } F_\nu \rightarrow F_\nu(\text{拡散}), \lambda \rightarrow \infty \text{ で } F_\nu \rightarrow u_\nu c$$

Neutrino heating

Bowers&Wilson(1982)

$$\Lambda_{\text{BW}}(R_{\text{BW}}) = \frac{1}{3 + |R_{\text{BW}}| \xi(R_{\text{BW}})}$$

with

$$R_{\text{BW}} \equiv -\lambda_t \cdot \frac{dE/dr}{E}$$

and

$$\xi(R_{\text{BW}}) \equiv 1 + \frac{3}{1 + \frac{1}{2} |R_{\text{BW}}| + \frac{1}{8} |R_{\text{BW}}|^2}$$

ボルツマン方程式の解法(2/3)

$$\partial_t E_\nu + \nabla F_\nu = Q_\nu^0 \quad (0^{\text{th}}\text{-order moment equation})$$

$$\partial_t F_\nu + \nabla P_\nu = Q_\nu^1 \quad (1^{\text{st}}\text{-order moment equation})$$

✓ M1 closure (1次のmomentの式まで解く)

$$P_\nu = P_\nu(E_\nu, F_\nu) \quad \text{階層性を閉じるための仮定する。}$$

Eddington tensorを以下の形に仮定する。

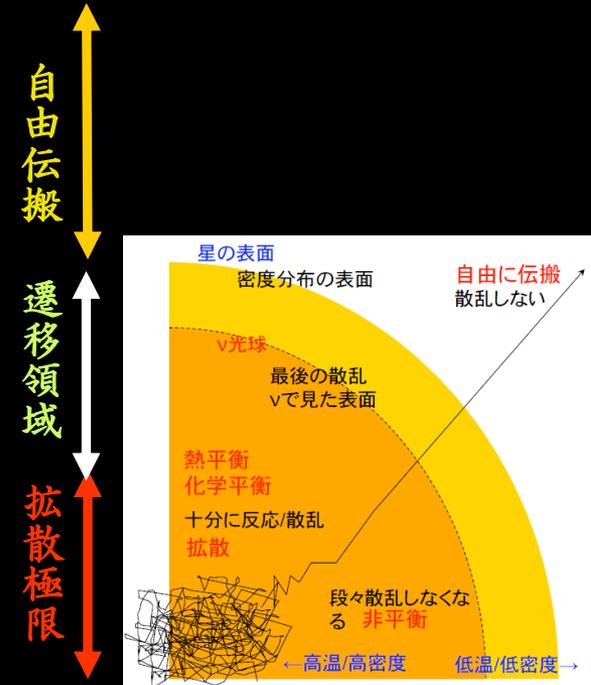
$$P_\nu^{ij} = \left(\frac{1 - p_\nu}{2} \delta^{ij} + \frac{3p_\nu - 1}{2} \frac{F_\nu^i F_\nu^j}{F_\nu^2} \right) E_\nu \quad (\text{Audit et al. 2002})$$

Eddington factor

$$p_\nu = \frac{1}{3} + \frac{1}{15} (6f_\nu^2 - 2f_\nu^3 + 6f_\nu^4)$$

Flux factor

$$f_\nu = F_\nu / cE_\nu$$



Free-streaming limit

Semi-transparent

Diffusion limit

自由伝搬

遷移領域

拡散極限

☆ Diffusion limitを取ると、 $f_\nu \rightarrow 0$

$$p_\nu \rightarrow 1/3, P_\nu(\text{輻射圧}) \rightarrow 1/3 E_\nu$$

☆ streaming limitを取ると、 $f_\nu \rightarrow 1$

$$p_\nu \rightarrow 1, P_\nu(\text{輻射圧}) \rightarrow E_\nu$$

FLD、M1共に二つの極限状態を内挿したフォーマリズム

ボルツマン方程式の解法(3/3)

VE; Rampp & Janka (1998)

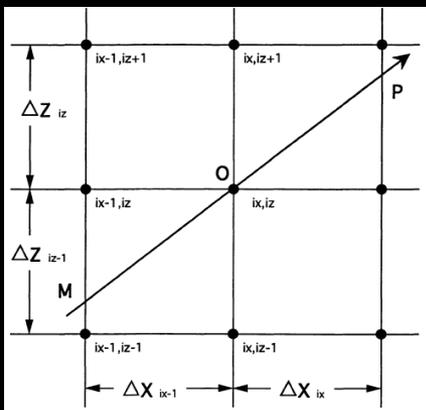
Sn: Livne et al. (04), Hubney & Burrows(06)

$$\partial_t E_v + \nabla F_v = Q_v^0, \quad (0^{\text{th}}\text{-order moment equation})$$

$$\partial_t F_v + \nabla P_v = Q_v^1, \quad (1^{\text{st}}\text{-order moment equation})$$

✓ Variable Eddington factor method

✓ Rayにそって実際に輸送方程式を解き、Iを決める(ray-method)



$$\frac{\partial I}{\partial s} = \chi(S - I)$$

$$I_O = I_M \exp(-\Delta\tau_M) + \int_0^{\Delta\tau_M} dt S(t) \exp[-(\Delta\tau_M - t)]$$

✓ Intensityが求められたら、諸量が分かる

$$E = \frac{1}{c} \oint I(\mathbf{n}) d\omega = \frac{1}{c} \int_0^{2\pi} \int_{-1}^1 I(\mu, \Phi) d\mu d\Phi,$$

$$P_{zz} = \frac{1}{c} \oint I(\mathbf{n}) n_z n_z d\omega = \frac{1}{c} \int_0^{2\pi} \int_{-1}^1 I(\mu, \Phi) \mu^2 d\mu d\Phi$$

✓ S_N法 (Spectral ordinates method)

$$\begin{aligned} \frac{1}{c} \frac{\partial f_v}{\partial t} + \frac{\mu_v}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 f_v) + \frac{\sqrt{1-\mu_v^2} \cos \phi_v}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} (\sin \theta f_v) + \frac{\sqrt{1-\mu_v^2} \sin \phi_v}{r \sin \theta} \frac{\partial f_v}{\partial \phi} \\ + \frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial \mu_v} [(1-\mu_v^2) f_v] + \frac{\sqrt{1-\mu_v^2} \cos \theta}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \phi_v} (\sin \phi_v f_v) = \frac{1}{c} \left(\frac{\partial f_v}{\partial t} \right)_{\text{collision}} \end{aligned}$$

Momentを取らず、直接ボルツマン方程式を角度方向まで差分を取って解く。
(formalismはstraightforwardだが、とにかく演算量が大変)

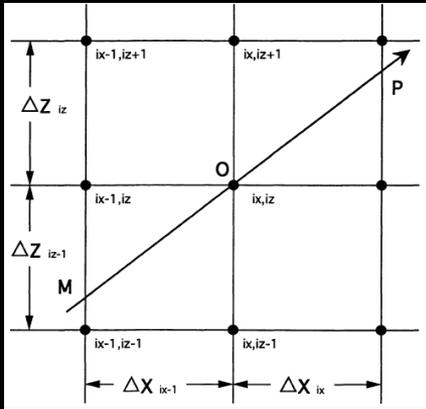
ボルツマン方程式の解法(3/3)

$$\partial_t E_\nu + \nabla F_\nu = Q_\nu^0 \quad (0^{\text{th}}\text{-order moment e})$$

$$\partial_t F_\nu + \nabla P_\nu = Q_\nu^1 \quad (1^{\text{st}}\text{-order moment e})$$

✓ Variable Eddington factor method

✓ Rayにそって



$$\frac{\partial I}{\partial s} = \chi(S - I)$$

✓ Intensityが求

$$E = \frac{1}{c} \oint I(\mathbf{n}) d\omega$$

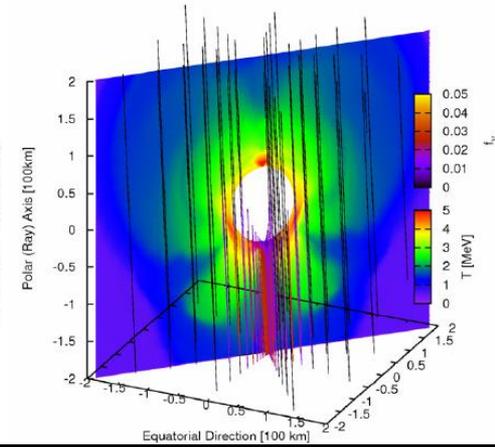
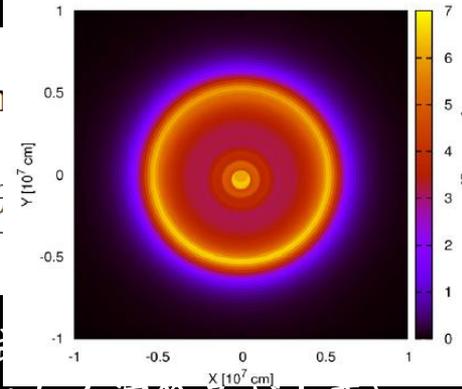
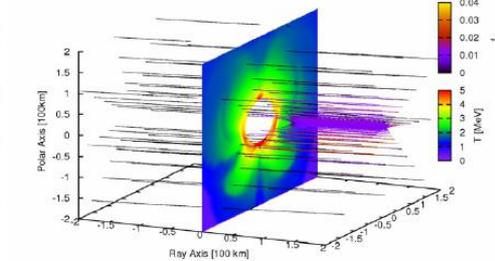
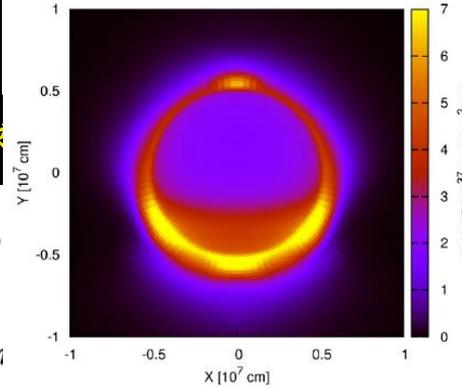
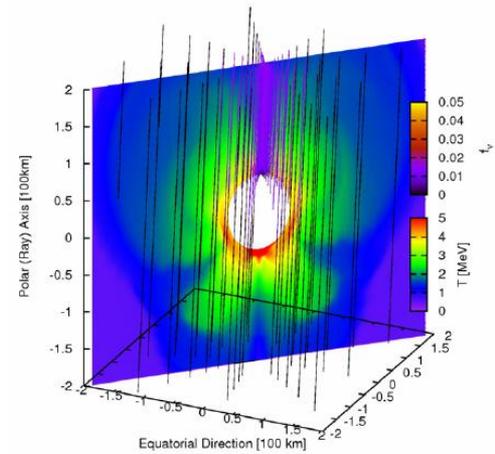
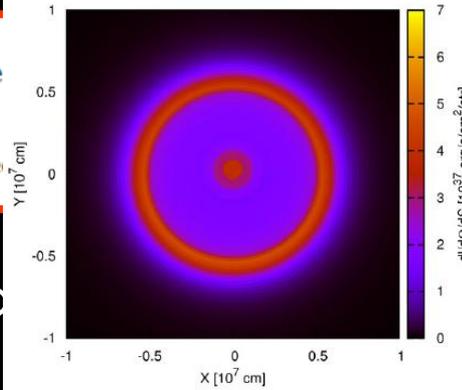
$$P_{zz} = \frac{1}{c} \oint I(\mathbf{n}) n_z n_z d\omega$$

✓ S_N法 (Spectral ordinates method)

$$\frac{1}{c} \frac{\partial f_\nu}{\partial t} + \frac{\mu_\nu}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 f_\nu) + \frac{\sqrt{1-\mu_\nu^2} \cos \phi_\nu}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} (\sin \theta f_\nu) + \frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial \mu_\nu} [(1-\mu_\nu^2) f_\nu] + \frac{\sqrt{1-\mu_\nu^2} \cos \epsilon}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \epsilon} (\sin \epsilon f_\nu) = Q_\nu$$

Momentを取らず、直接ボルツマン方程式を解く (formalismはstraightforwardだが、とにかく演算量が大変)

Ray-trace 計算の一例



ニュートリノ輸送計算法の長所と短所

	Diffusive regime	Semi-transparent regime	Transparent regime
Boltzmann solver (VEF, S_N)	Truncation errors in flux		Insufficient angular resolution
Flux-limited Diffusion, M1 closure		flux-factor is model-dependent	flux-factor is unknown
Ray-tracing method	Suffer from short mean free path	Limited by reaction	

2成分近似ボルツマン formalism (Basel-Tokyo)

The ideal algorithm combines the three orange fields !

2成分近似ボルツマン輸送法

The neutrino distribution function “f” を2成分に分解する

$$f = f^t + f^s$$

f^t :trapped part – opaque region

f^s :streaming part – transparent region

Boltzmann equation is then ,

$$D(f = f^t + f^s) = C = C^t + C^s$$

The two components are evolved separately ,

$$\begin{aligned} D(f^t) &= C^t - \Sigma \\ D(f^s) &= C^s + \Sigma \end{aligned}$$

Σ - is the (diffusion) term, which converts trapped into streaming part and vice versa.
 -is determined between the free-streaming and the β -equilibrium limit via a kind of flux limiter.

流体素片

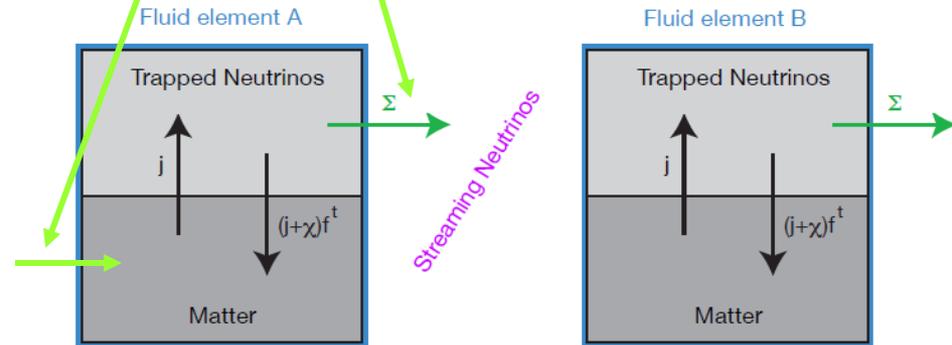
$$D(f) = j - \chi * f$$

$$f = f(\text{trapped}) + f(\text{streaming}) = f^t + f^s$$

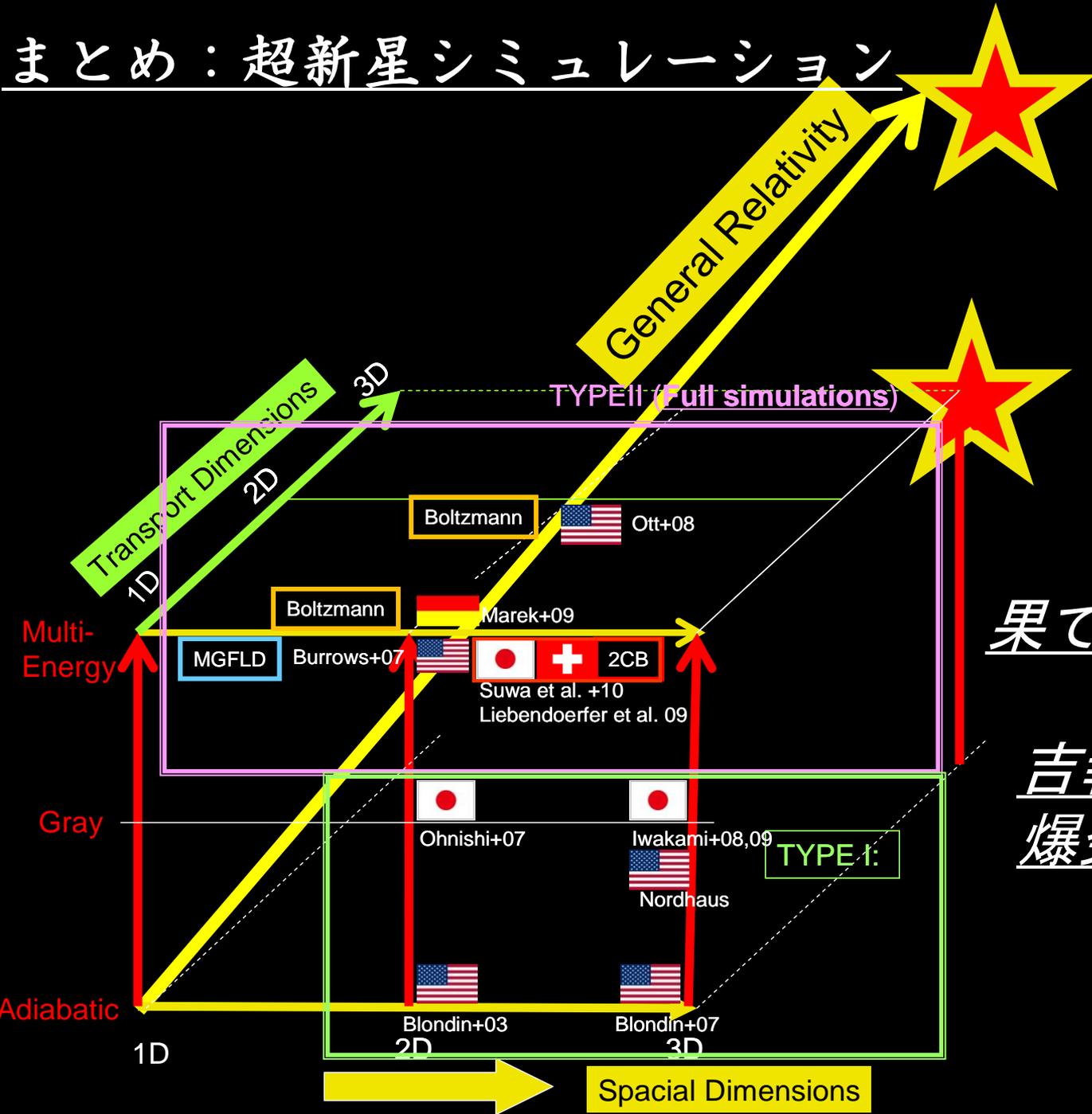
$$D(f^t) = j - \chi * f^t - \Sigma \quad (1) \quad \text{Different approx. for trapped \& streaming neutrino components!}$$

$$D(f^s) = -\chi * f^s + \Sigma \quad (2)$$

Σ determined by diffusion limit of (1)



まとめ：超新星シミュレーション



果てしなき旅は続く..

吉報：3D, GRみんな爆発には良さそう？

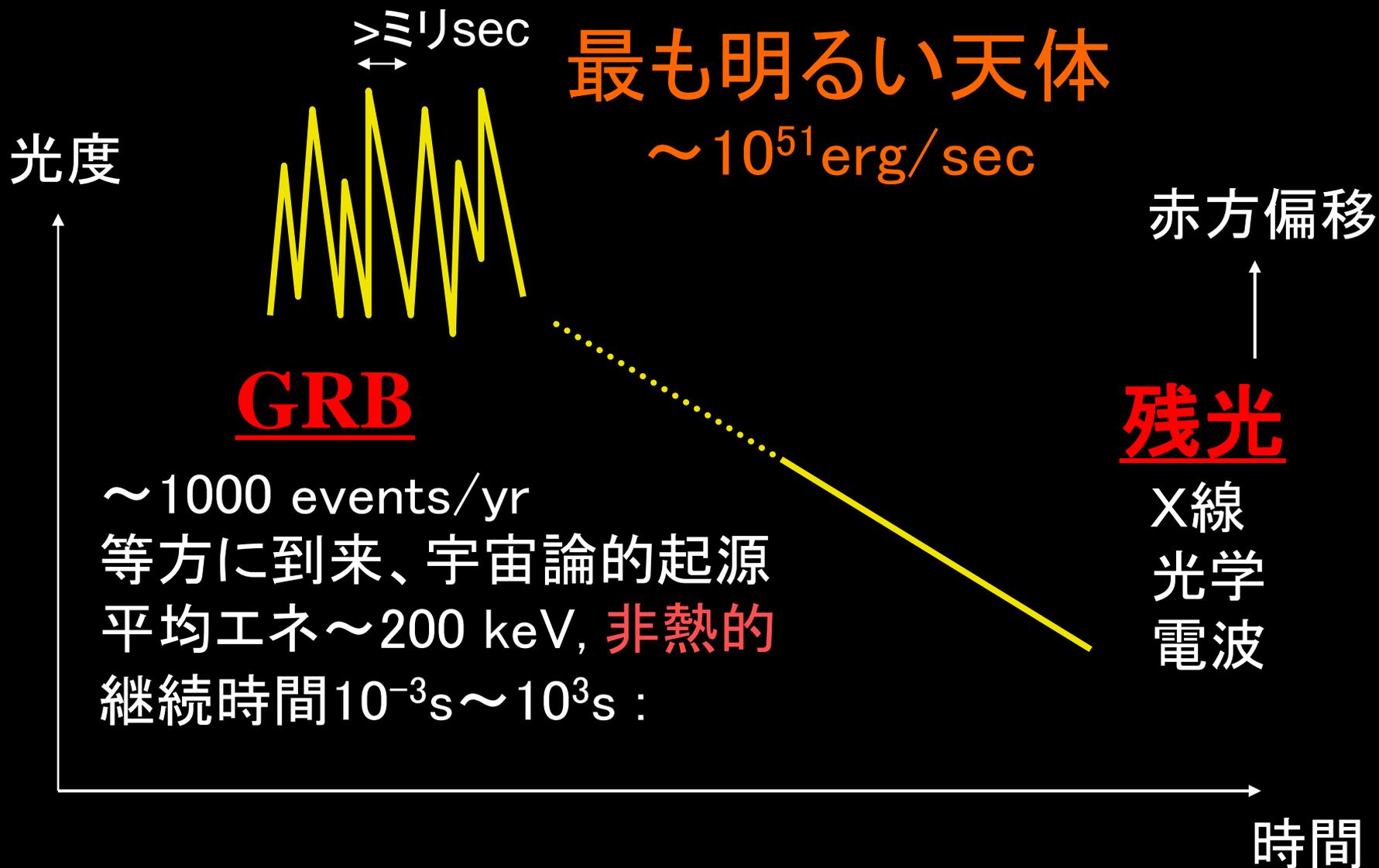
§ 3-3

超新星とガンマ線バースト

(以降の話の筋)

- ✓ ガンマ線バースト (Gamma-Ray Burst):
ガンマ線がバースト的に観測される天体現象
- ✓ 過去40年に渡って起源が不明
- ✓ 超新星との相関が報告される (10年前)
普通の超新星じゃない極超新星
- ✓ 極超新星のエンジンの理解 ⇔ 恒星進化論の統一的解明

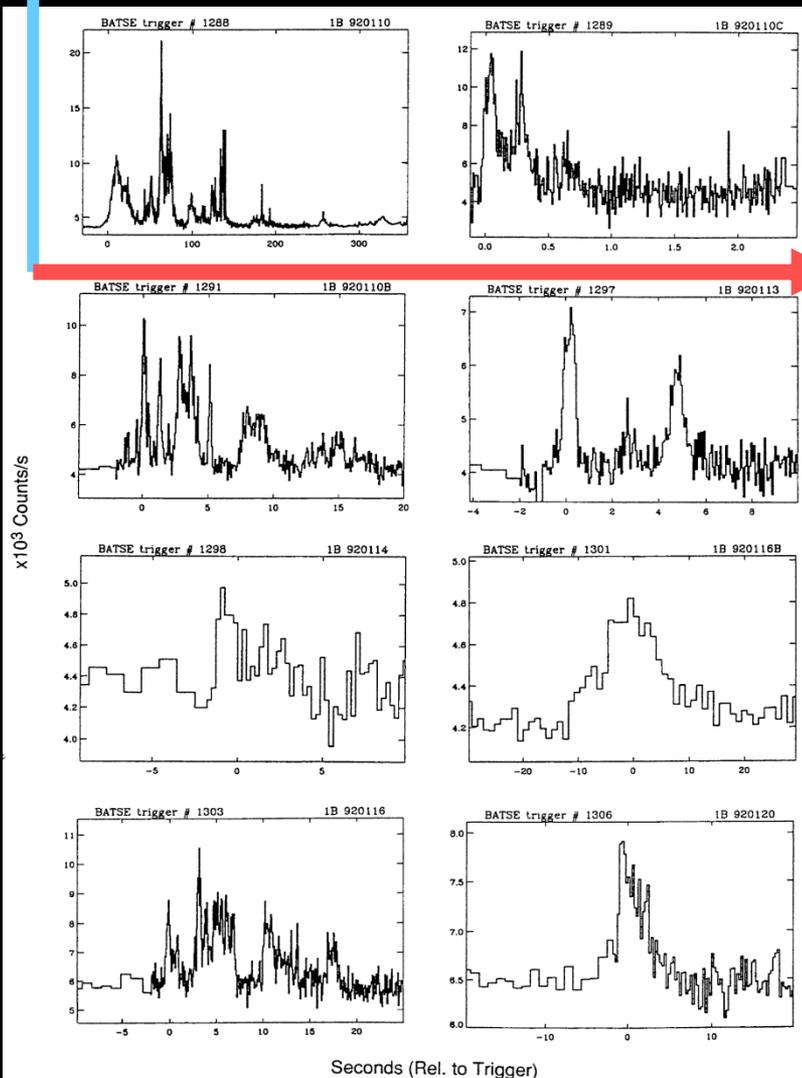
観測のまとめ



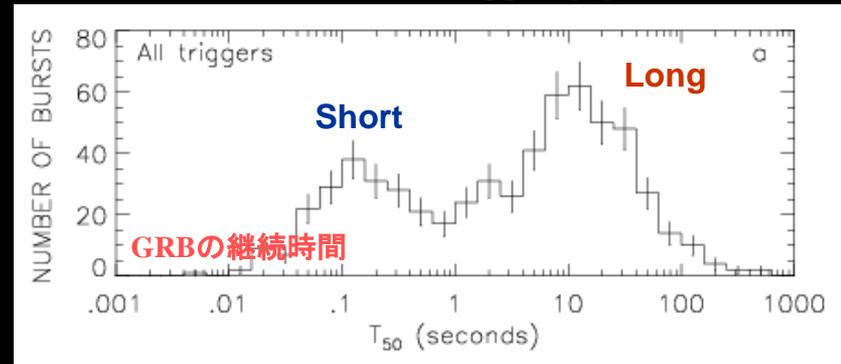
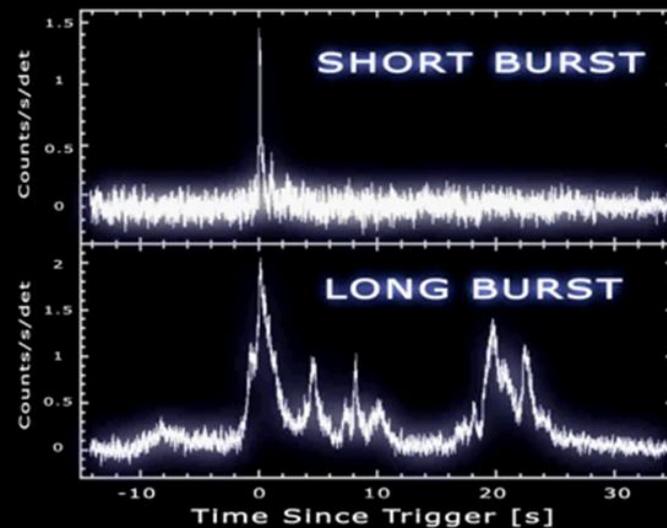
光子カウント数

GRBの時間変動

Fishman&Meegan(95)



時間



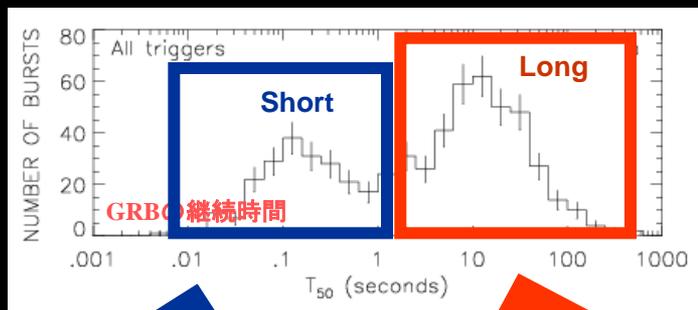
Long burst、Short burstの二極分布

それぞれタイムプロファイルが全然違う。ソースは何？

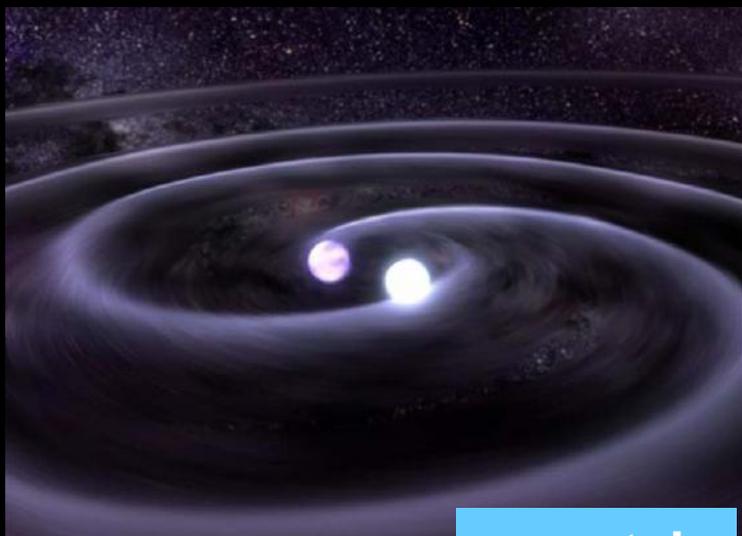
Figure 1 Sample page from the First BATSE Catalog of Gamma-Ray Bursts (Fishman et al 1994b), indicating the diversity in the time profiles, intensities, and durations of gamma-ray bursts.

色々あるのですが

現在の理解



中性子星合体



uncertain

超新星爆発

ガンマ線バーストの想像図

ほぼ光速のジェットが外層を突き破ったときにガンマ線バーストとして観測される

観測方向

降着円盤

ジェット

ブラックホール

Fe

Si

Mg, Ne, O, C

中心部で重力崩壊によりブラックホールが生まれ、降着円盤とジェットが形成される

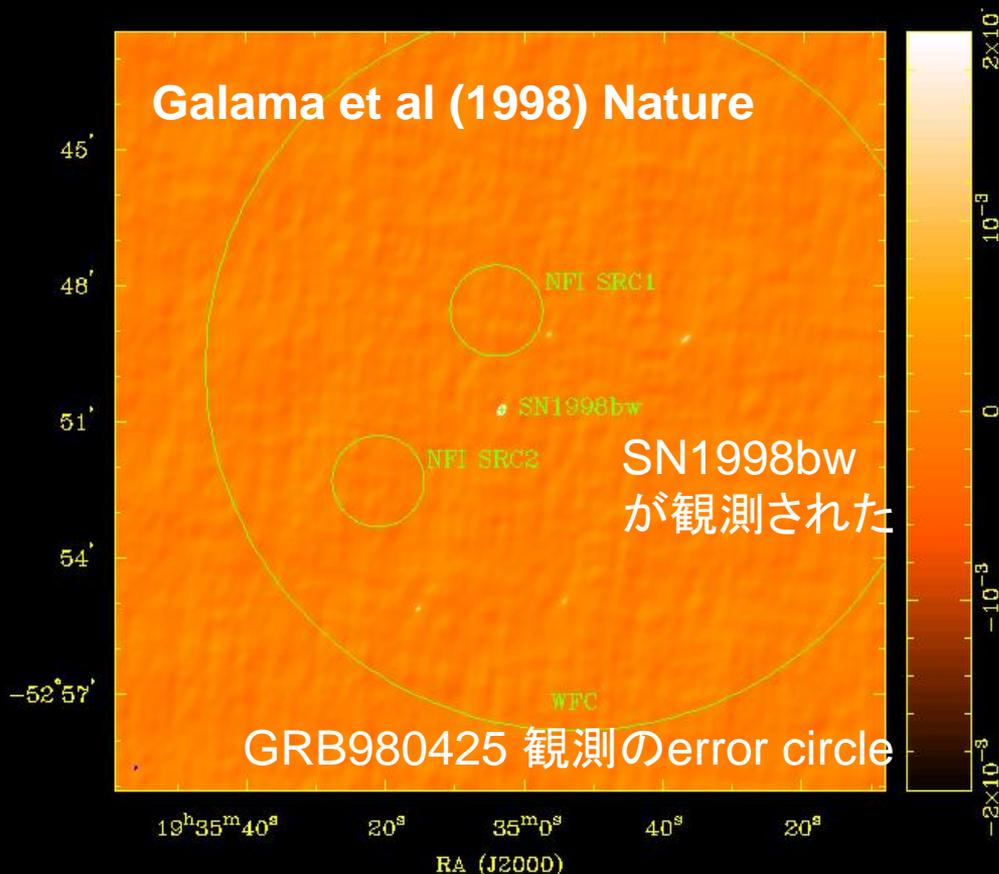
およそ100km

太陽の数十倍の重さを持つ大質量星 (水素、ヘリウムなどの外層がは)

©京都大学・戸谷友則

certain

謎の天体現象GRBと始めて相関が観測された天体 ：超新星だった！



イベントレート (per galaxy)

$$R_{\text{lbc}} \sim 10^{-2} \text{ yr}^{-1}$$

$$R_{\text{GRB}} \sim \sim 10^{-7} - 10^{-5} \text{ yr}^{-1}$$

Matsubayashi et al.
06

超新星とGRBが無相関と
すると、10年で同期する確率：
 $R_{\text{comb}} \sim 10^{-7}$

一方、数年の観測で
相関が実際観測された。

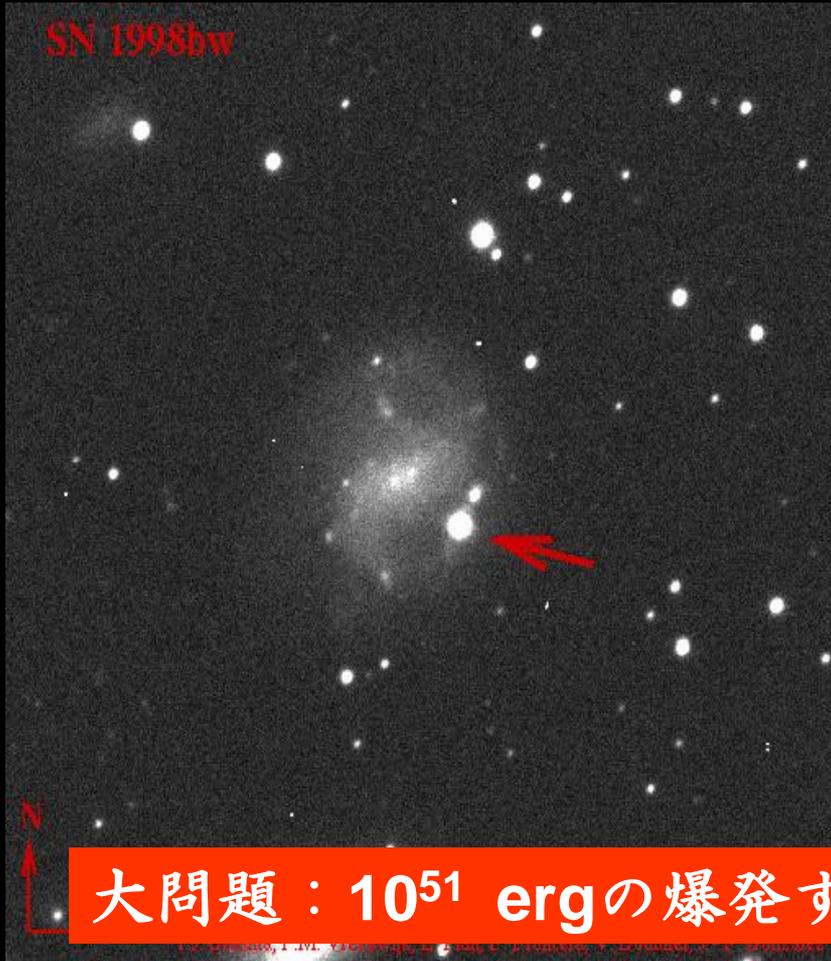
GRBと超新星は優位な相関がある！

RA = 19:35:09.320, Dec = -52:50:44.80, 4.79990873E+00 GHz at pixel (1025.00, 1025.00, 1.00)
Date: 2020.20 to 2023.2023 Spatial inc/bin : 4/4, 4/4
Image: grb980425c.4800.cln (grb980425c) Min/max = -4.94x10^-4 / 0.04026 Range = -2x10^-3 to 2x10^-3 JY/BEAM (li

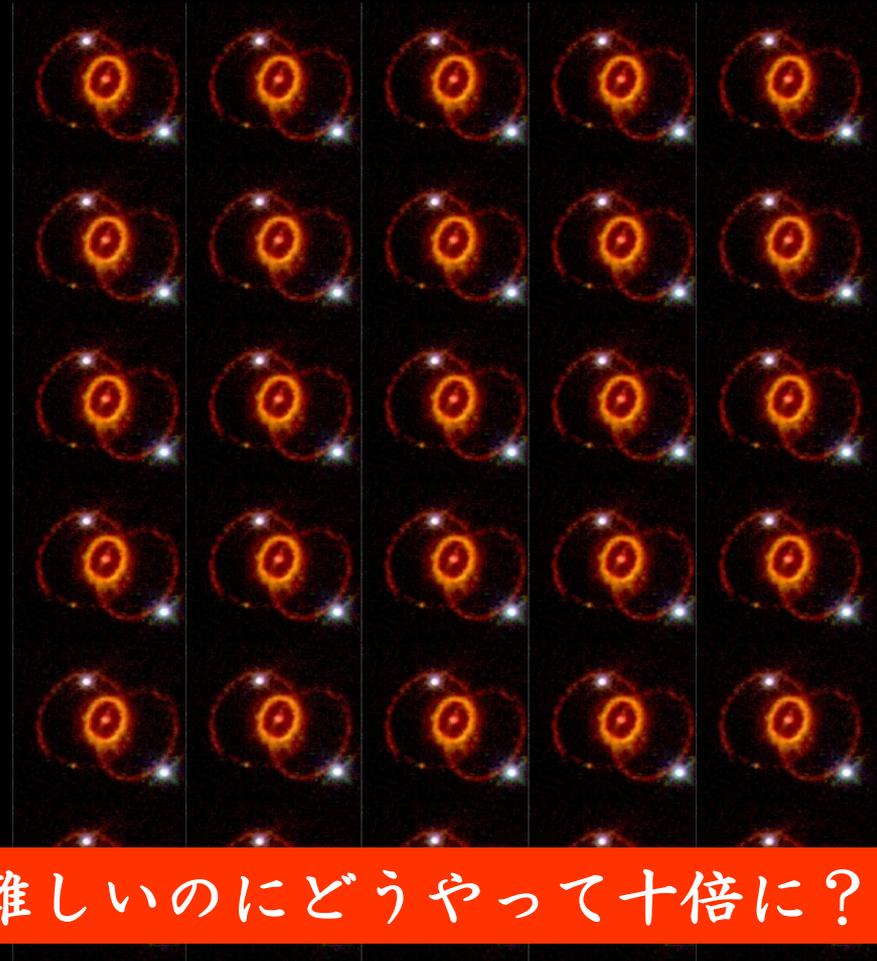
SN1998bw : Hypernova(極超新星)

SN 1998bw

SN 1987A



==

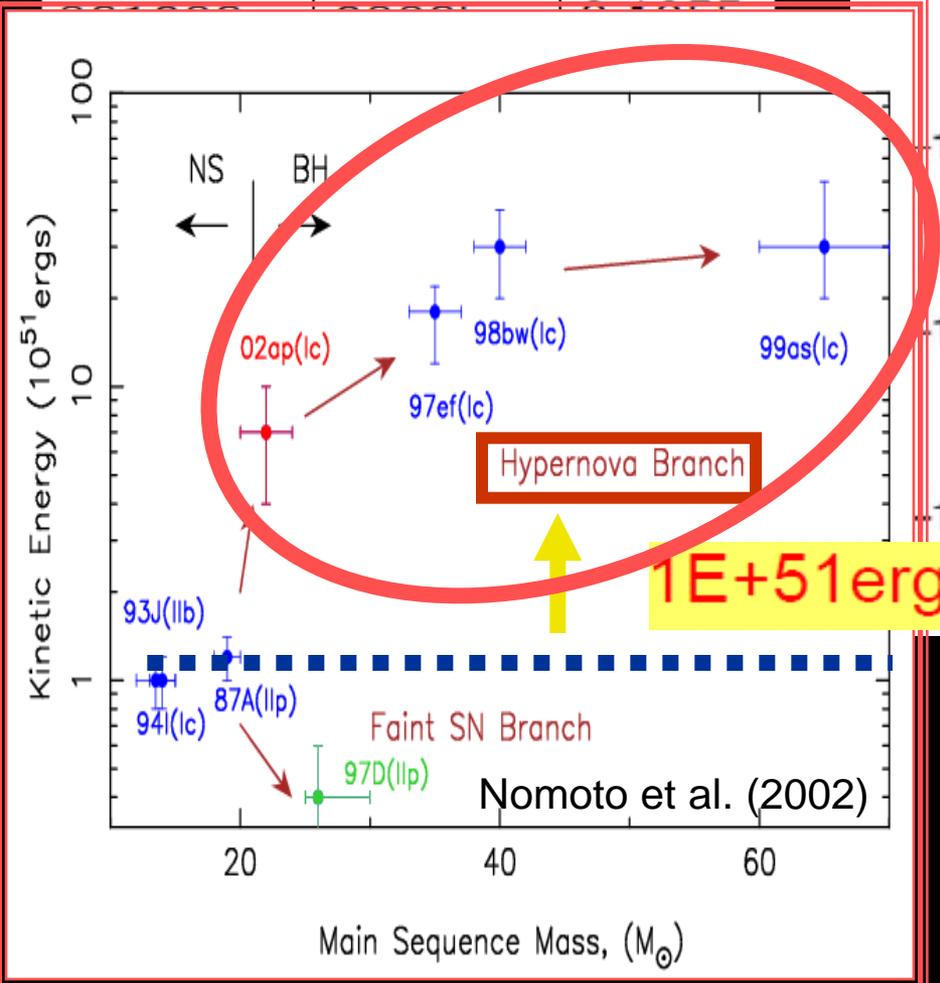
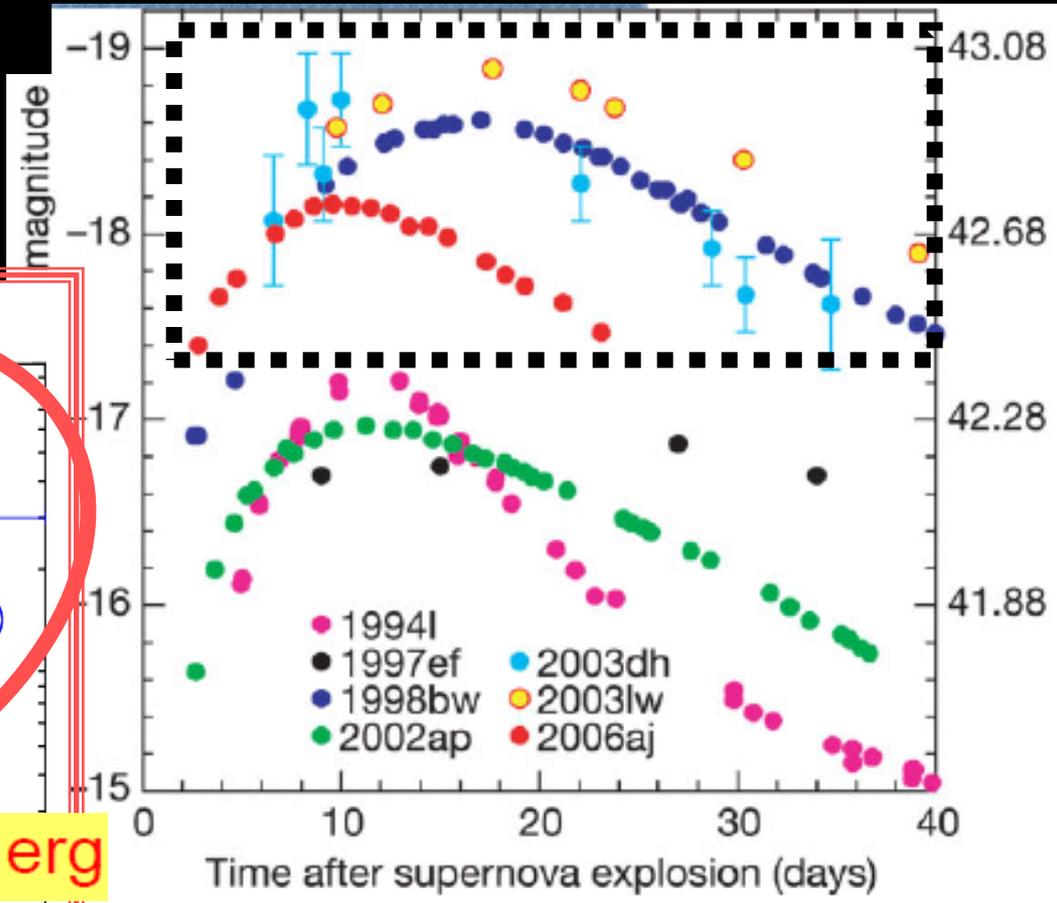


$E \sim 30 \times 10^{51} \text{ergs}$

$E \sim 1 \times 10^{51} \text{ergs}$

GRB (Long)と相関がある超新星は一般にenergetic

GRB/XRF	SN	z
980425	1998bw	0.0085
030329	2003dh	0.168



ふつうの超新星と極超新星は何が違うのか？
ちがうbranchに移る物理は何なのか？

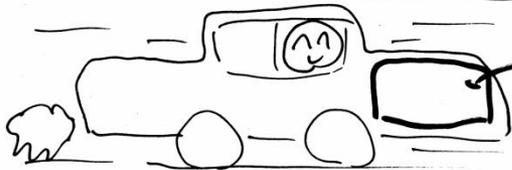
「ブラックホール・回転・磁場」が鍵

ガンマ線バーストの観測
(Afterglow etc..)

↑ よりよく説明するモデル

Fireball model

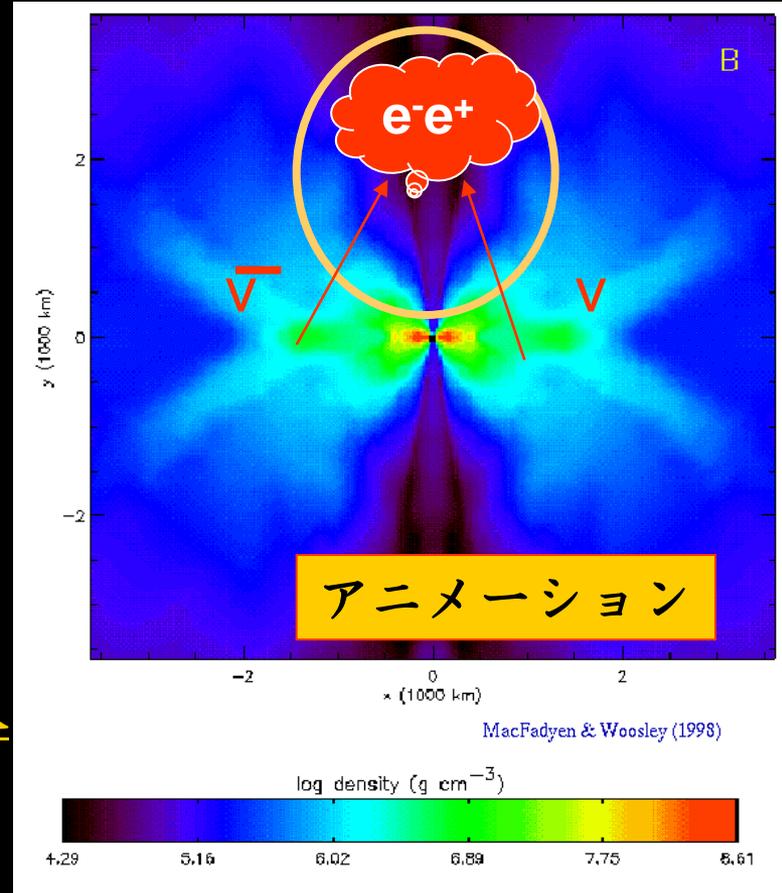
Meszaros&Rees'92



engine が必要

$$\begin{aligned} M &\sim 10^{-6} M_{\odot} \\ \gamma &\sim 100 \end{aligned} \quad \epsilon$$

星の中で実現するこ.



エッセンス：狭い領域に莫大なエネルギー注入

✓ ニュートリノ

$$\begin{aligned} \frac{dE_0}{dt} &\simeq 2.23 \times 10^{51} \left(\frac{d\theta}{10^\circ} \right)^2 \left[\frac{kT_{\text{eff}}(3r_g)}{10 \text{ MeV}} \right]^9 \\ &\times \left(\frac{r_g}{10 \text{ km}} \right)^3 \text{ ergs s}^{-1}. \end{aligned}$$

✓ 磁場

$$P = 1.7 \times 10^{50} \tilde{a}^2 f(\tilde{a}) \left(\frac{M}{M_{\odot}} \right)^2 \left(\frac{\langle B_H \rangle}{10^{15} \text{ gauss}} \right)^2 \text{ erg/s}$$

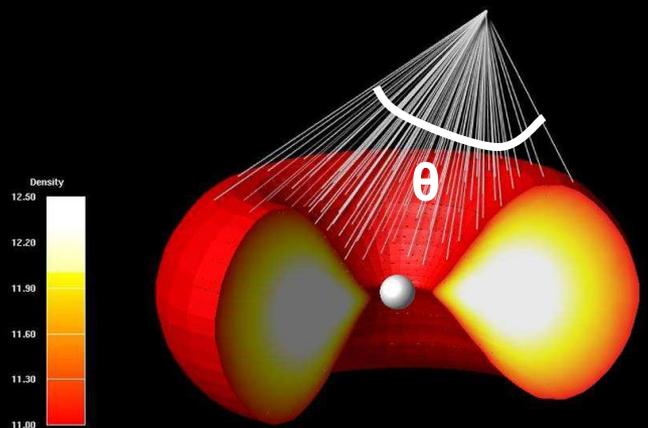
コラプサー・シナリオ

「Collapsar」: failed supernova

ニュートリノ駆動ガンマ線バースト



Goodman 1987, Asano & Fukuyama 2000 (ApJ)



✓ 加熱率 $\propto (1 - \cos \theta)$

円盤の対称性を考えても軸状が一番温められる

✓ ニュートリノ加熱率

$$\frac{dE_o}{dt} = 5.76 \times 10^{50} \left[\frac{kT_{\text{eff}}(3r_g)}{10 \text{ MeV}} \right]^9 \left(\frac{r_g}{10 \text{ km}} \right)^3 \text{ ergs s}^{-1}$$

for $R_{\text{in}} = 3r_g$, (20)

$$= 1.05 \times 10^{53} \left[\frac{kT_{\text{eff}}(3r_g)}{10 \text{ MeV}} \right]^9 \left(\frac{r_g}{10 \text{ km}} \right)^3 \text{ ergs s}^{-1}$$

for $R_{\text{in}} = 1.16r_g$, (21)

ニュートリノ加熱率

$$\frac{dN(r)}{dt dV} = \int \int f_\nu(p_\nu, r) f_{\bar{\nu}}(p_{\bar{\nu}}, r) \sigma |v_\nu - v_{\bar{\nu}}| d^3 p_\nu d^3 p_{\bar{\nu}}$$

反応率

断面積:

$$\sigma = 2c^2 K G_F^2 (p_\nu \cdot p_{\bar{\nu}})$$

$$K(\nu_\mu \bar{\nu}_\mu) = K(\nu_\tau \bar{\nu}_\tau) = \frac{1 - 4 \sin^2 \theta_w + 8 \sin^4 \theta_w}{6\pi}$$

$$K(\nu_e \bar{\nu}_e) = \frac{1 + 4 \sin^2 \theta_w + 8 \sin^4 \theta_w}{6\pi}$$

運動学: $(p_\nu \cdot p_{\bar{\nu}}) = \frac{\epsilon_\nu \epsilon_{\bar{\nu}}}{c^2} [1 - \cos(\theta\nu - \theta\bar{\nu})]$

分布関数:

$$n(\epsilon_\nu) = \frac{g_\nu}{(hc)^3} \frac{1}{\exp(\epsilon_\nu/kT_{\text{eff}}) + 1}$$

Energetics 的には十分

ただし降着円盤の温度、半径に非常に敏感

⇒ ブラックホール周りの時空での構造を決める
一般相対論的流体計算

⇒ ニュートリノ加熱率

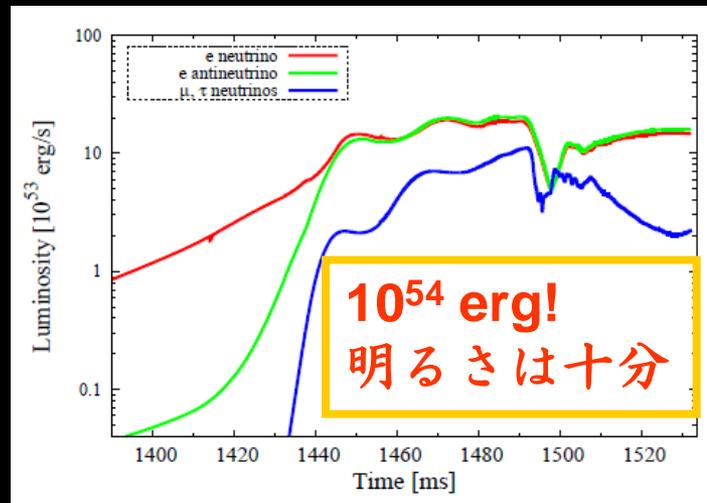
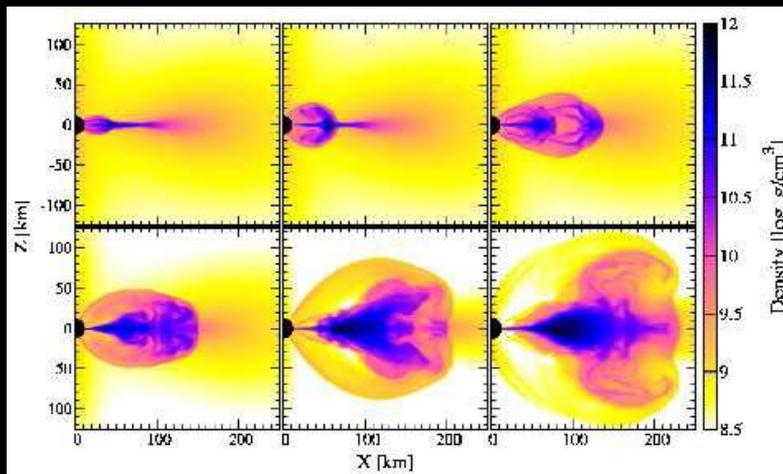
マルチアングル (フルの) ニュートリノ輻射輸送

最近の結果

✓フルの一般相対論的計算+ニュートリノ漏れ出し法

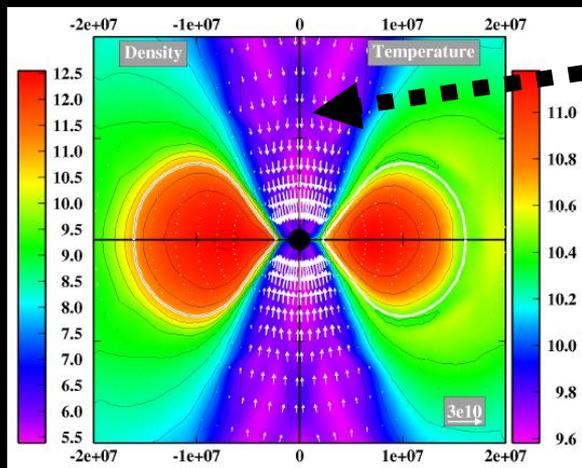
Sekiguchi & Shibata(2011)

重力崩壊⇒ブラックホール形成⇒降着円盤の成長



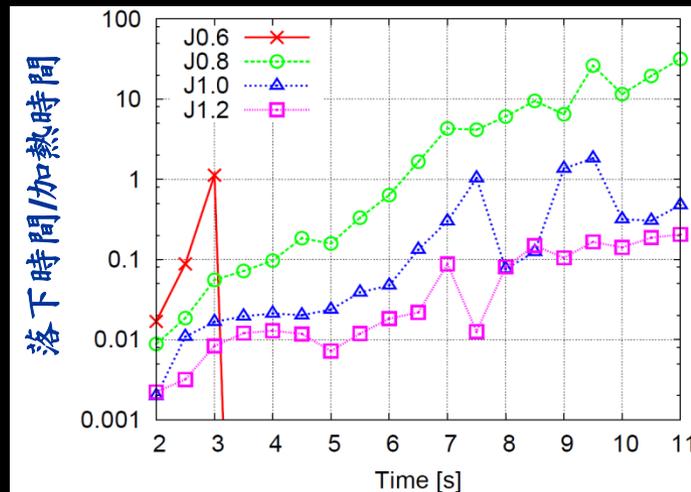
✓特殊相対論計算+Ray-tracing ニュートリノ加熱

Harikae et al. (2010)



落下時間

$$\tau \sim (G\bar{\rho})^{-1/2}$$





1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

Log Density [g/cm^3]



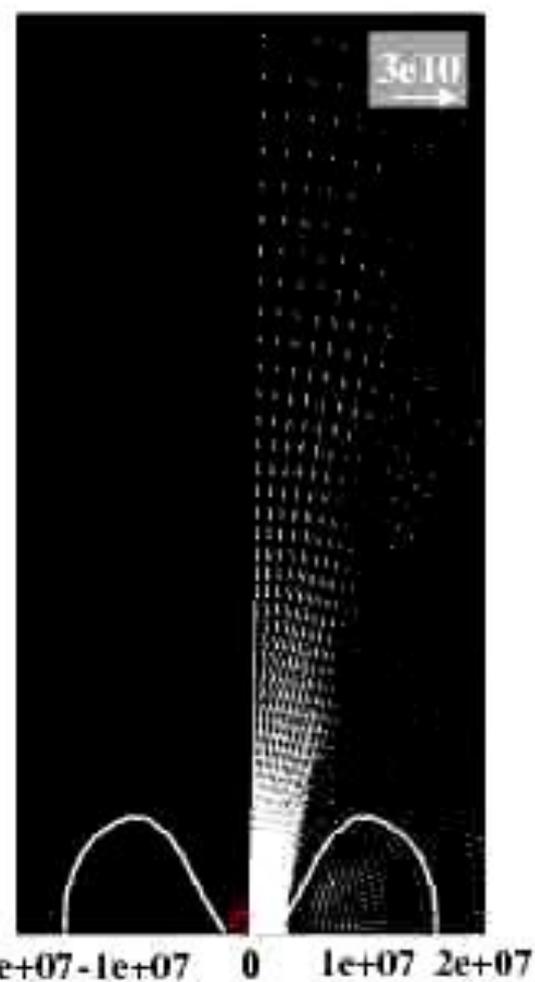
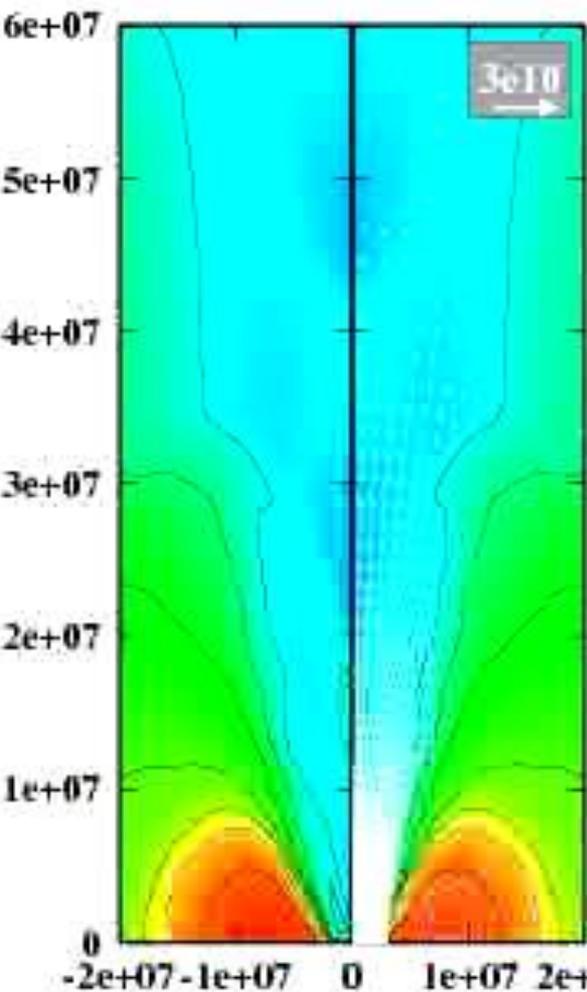
1 2 3 4

Log Entropy



1.0 1.5 2.0 2.5 3.0

Lorentz Factor



磁場駆動ガンマ線バースト

エネルギー源：ブラックホールの回転エネルギー

Blandford-Znajek process (MNRAS, 179, 433, 1977)

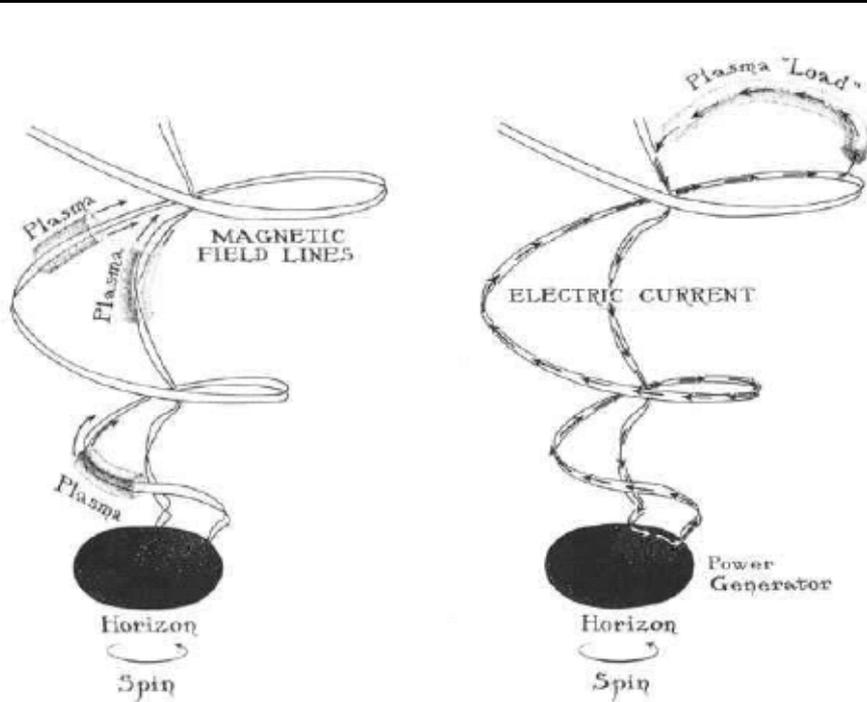


FIG. 4: Illustration of the Blandford-Znajek Process and circuit analogue. Taken from [6].

(Thorne, Membrane パラダイムより)

Kerr BHから引き抜ける回転エネルギー

$$E_{rot} = Mc^2 - M_{irr}c^2$$

$$E_{rot} = f(\tilde{a})Mc^2$$

$$f(\tilde{a}) = 1 - \sqrt{\frac{1}{2}[1 + \sqrt{1 - \tilde{a}^2}]}$$

$$\tilde{a} = \frac{Jc}{M^2G}$$

無次元Kerr parameter

$$\tilde{a} = 1$$

Maximally rotating Kerr BH
(Schwarzschild半径を光速で回転する場合)

$$E_{BZ} = 1.8 \times 10^{54} \epsilon_{\Omega} f(\tilde{a}) \left(\frac{M}{M_{\odot}}\right) \text{erg}$$

BZ processの継続時間

$$\begin{aligned} \tau_{BZ} &\sim \frac{Mc^2}{B^2 R^2 c} \sim \frac{Mc^5}{B^2 M^2 G^2} \\ &= \frac{c^5}{B^2 M G^2} = 2.7 \times 10^3 \left(\frac{10^{15} \text{gauss}}{B}\right)^2 \left(\frac{M_{\odot}}{M}\right) \text{s} \end{aligned}$$



回転しているBHの時空: Kerr 時空と BZプロセス

H.K. Lee et al, astroph/9906213

$$ds^2 = -\alpha^2 dt^2 + g_{ij}(dx^i + \beta^i dt)(dx^j + \beta^j dt).$$

Boyer-Lindquist 座標

$$ds^2 = -\frac{\Delta - a^2 \sin^2 \theta}{\Sigma} dt^2 - \frac{4aGMr \sin^2 \theta}{\Sigma} dt d\phi + \frac{\Sigma}{\Delta} dr^2 + \Sigma d\theta^2 + \frac{(r^2 + a^2)^2 + a^2 \Delta \sin^2 \theta}{\Sigma} \sin^2 \theta d\phi^2$$

$$\Sigma = r^2 + a^2 \cos^2 \theta$$

$$\Delta = r^2 - 2GMr + a^2$$

Kerr parameter

$$a \equiv \frac{J}{M}$$

BHの角運動量Jと質量Mの比

Ergosphere: $\Delta - a^2 \sin^2 \theta = 0$ の条件から

$$r_0 = M + \sqrt{M^2 - a^2 \cos^2 \theta}$$

$$r_+ < r < r_0$$

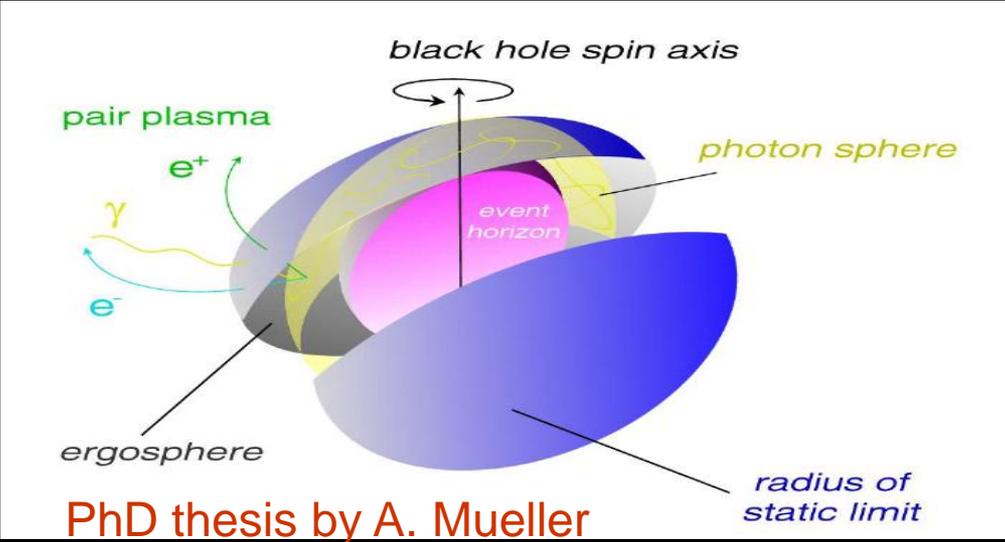
では、non-static observer.
Frame-dragging とよぶ

Event horizon:

$$\Delta = 0$$

となる条件から

$$r_+ = M + \sqrt{M^2 - a^2}$$





Blandford-Znajek process のOrder評価

・Kerr BH の表面積

$$A_H = 4\pi(r_H^2 + a^2) \quad \text{from}$$

$$dS_i = \sqrt{\det(g_{ij})} \epsilon_{ijk} \frac{\partial x^j}{\partial b} \frac{\partial x^k}{\partial c} db dc$$

・Kerr BH のentropy(面積定理)

$$S_H = \frac{k_B}{4\hbar} A_H$$

$$= \frac{\pi k_B}{\hbar} (r_H^2 + a^2) = \frac{2\pi k_B}{\hbar} M r_H.$$

・Kerr BH のirreducible mass

$$M_{irr} = \sqrt{\frac{A_H}{16\pi}} = \frac{1}{2} \sqrt{r_H^2 + a^2} = \sqrt{\frac{S_H}{4\pi}}$$

・Kerr BH の全質量

$$M = \sqrt{\frac{S_H}{4\pi} + \frac{J^2}{S_H}} = \sqrt{M_{irr}^2 + \frac{J^2}{4M_{irr}^2}}$$

・Kerr BHから引き抜ける回転エネ

$$E_{rot} = M c^2 - M_{irr} c^2$$

$$E_{rot} = f(\tilde{a}) M c^2$$

$$f(\tilde{a}) = 1 - \sqrt{\frac{1}{2} [1 + \sqrt{1 - \tilde{a}^2}]}$$

$$\tilde{a} = \frac{Jc}{M^2 G} \quad \text{無次元Kerr parameter}$$

$\tilde{a} = 1$ Maximally rotating Kerr BH
(Schwarzschild半径を光速で
回転する場合)

・BZで引き抜ける回転エネは

$\epsilon_\Omega = \frac{\Omega_F}{\Omega_H}$ のefficiencyがかかる。

$$E_{BZ} = 1.8 \times 10^{54} \epsilon_\Omega f(\tilde{a}) \left(\frac{M}{M_\odot}\right) \text{erg}$$

BZ processの継続時間

$$\tau_{BZ} \sim \frac{M c^2}{B^2 R^2 c} \sim \frac{M c^5}{B^2 M^2 G^2}$$

$$= \frac{c^5}{B^2 M G^2} = 2.7 \times 10^3 \left(\frac{10^{15} \text{gauss}}{B}\right)^2 \left(\frac{M_\odot}{M}\right) \text{s}$$

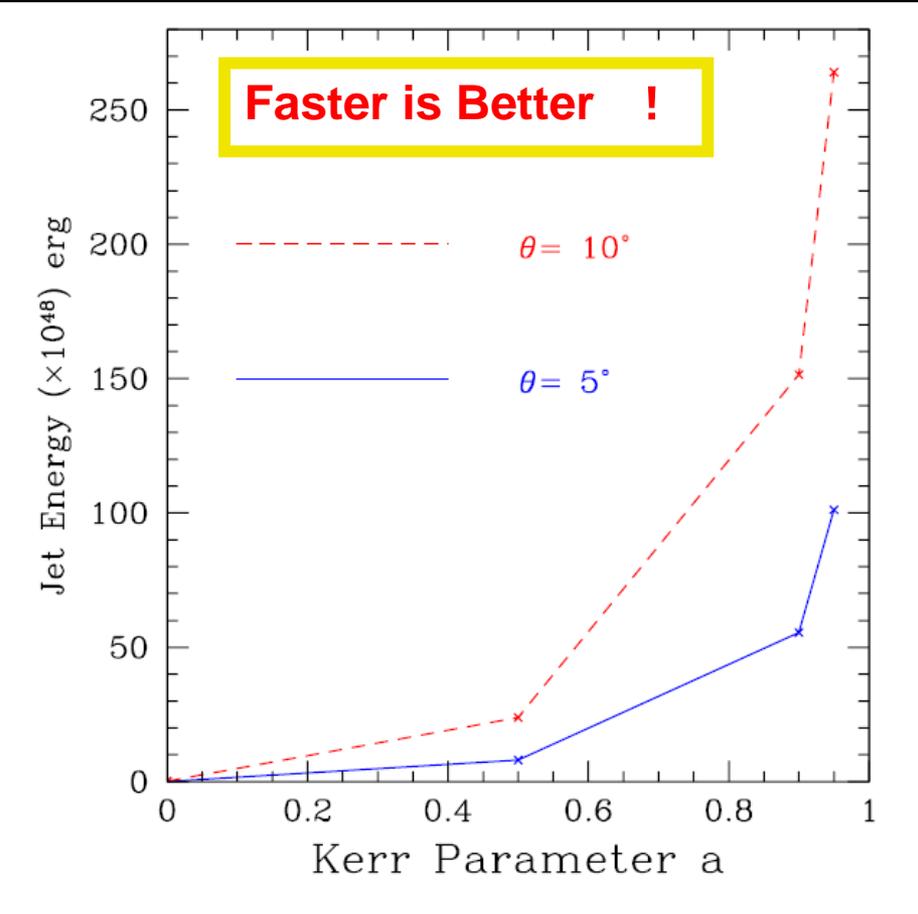
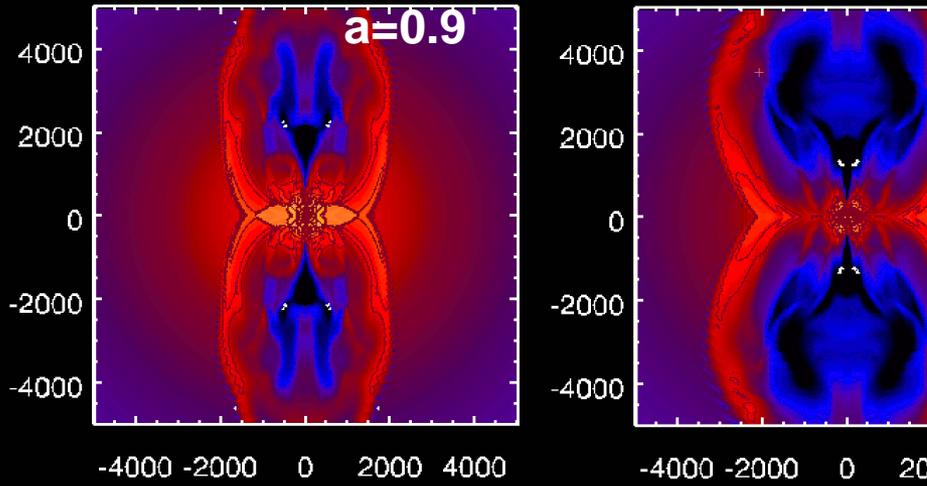
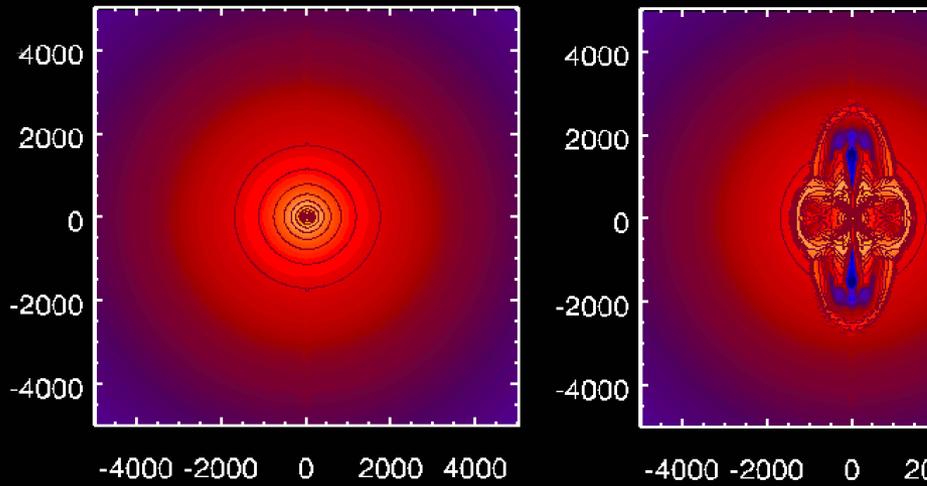
Recent simulations of BZ processes

Nagataki (2010,2011)

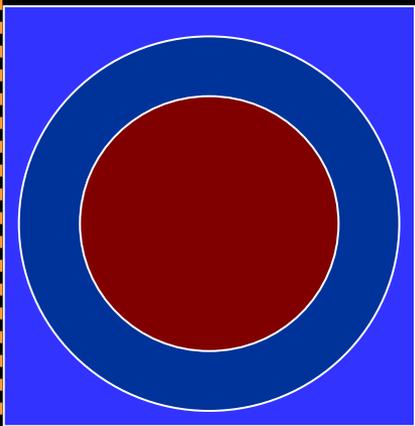
✓ 2D GRMHD (fixed metric)

$a=0$

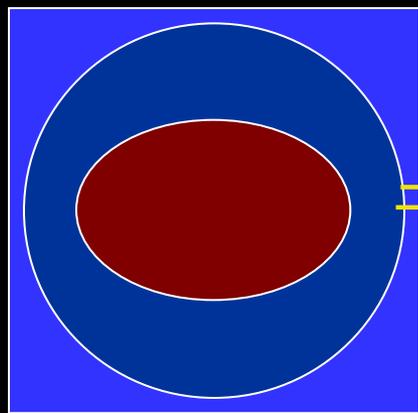
$a=0.5$



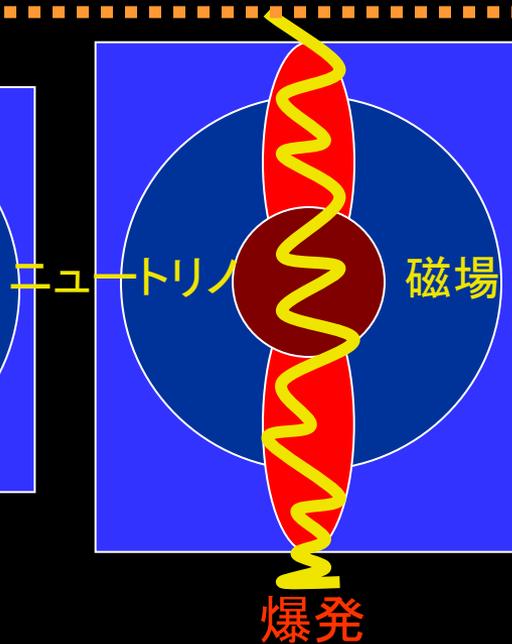
まとめ



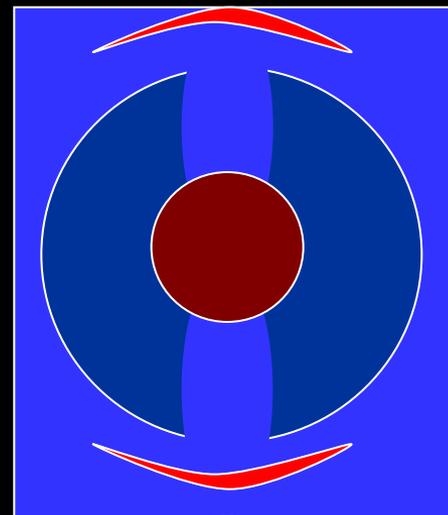
重力崩壊



コアバウンス



爆発



中性子星形成

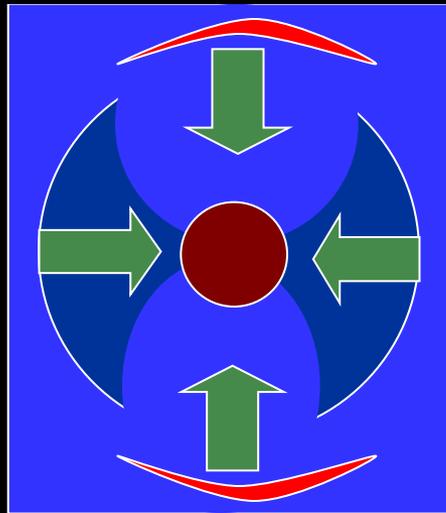
恒星進化論の最終段階を統一的に理解すること

数値シミュレーションで連続的に再現することが不可欠。
今後、高エネルギー数値天文学のグランドチャレンジ

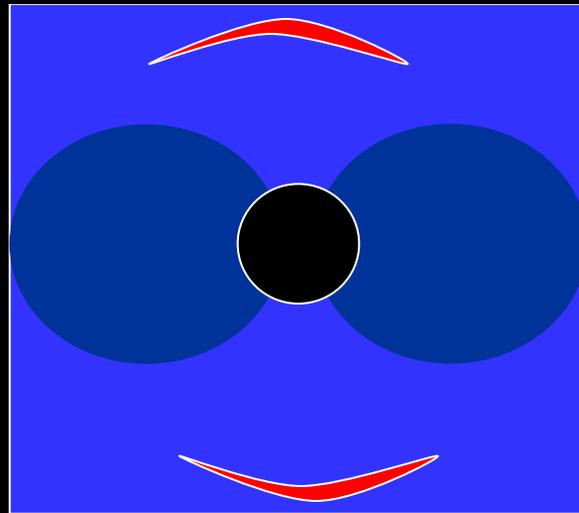
時間発展

ブラックホール形成のダイナミクス

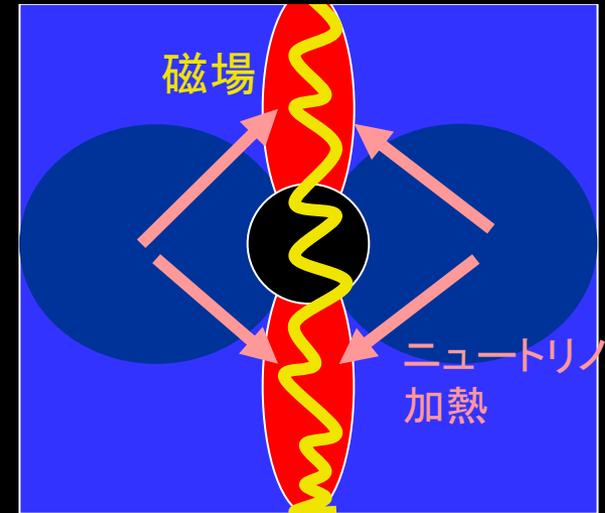
極超新星のメカニズム
 γ 線バーストの形成



フォールバック



降着円盤、ブラックホール形成



極超新星→ γ 線バースト

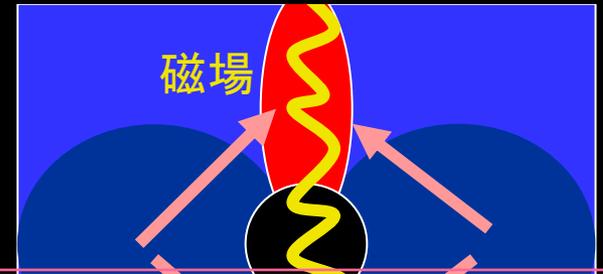
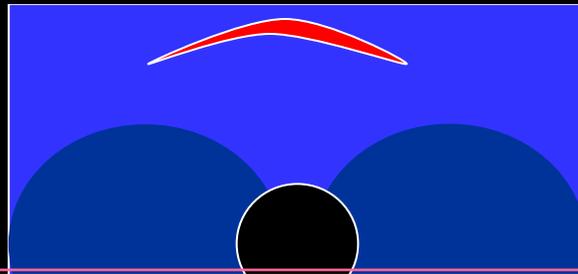
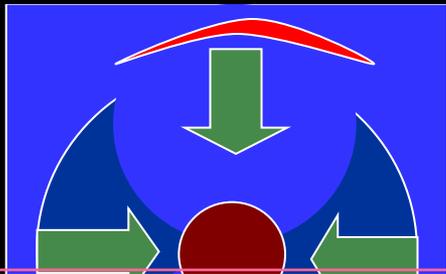
恒星進化論の最終段階を統一的に理解すること

数値シミュレーションで連続的に再現することが不可欠。
今後、高エネルギー数値天文学のグランドチャレンジ

時間発展

ブラックホール形成のダイナミクス

極超新星のメカニズム
γ線バーストの形成



- ✓ 「ニュートリノ輸送」 + 「一般相対論」シミュレーションが必要
- ✓ 現在、それぞれのフェイズに特化した計算が進んでいる
- ✓ 今後よりコンシステントな計算へ移行しつつある
- ✓ 少なくともExa-scaleの計算資源が必要！